

## 出水麓遺跡 (3)

—出水ふもと資料館（仮称）の建設に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—  
—出水小学校 6 号棟改築事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—

2018 年 3 月

出水市教育委員会

## 序 文

本書は、鹿児島県出水市教育委員会が平成24年度及び同25年度、同28年度に実施した出水麓遺跡の確認・記録保存発掘調査報告書です。

遺跡のある出水市麓町は、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された出水麓があり、江戸時代から昭和初期にかけての武家屋敷や武家門、石垣・生垣などが多く残されています。

これら出水麓の武家屋敷をはじめとする、近世の文化財を紹介するための拠点施設として、出水市は平成 29 年 5 月 1 日に出水麓歴史館を開館いたしました。

同館の建設地は、出水麓のあつかい 噺 役所などがあったとされている場所で、これまでも発掘調査が行われています。

発掘調査では、江戸時代の建物跡が確認されたほか、県内をはじめ国内の各地で生産されたものや国外から輸入された陶磁器などが数多く出土しました。

これらの成果は、地域の歴史を知る上で貴重な資料になるものと考えられます。この報告書が文化財の保護並びに学術研究、郷土史研究のために広く活用されることを願っております。

最後になりましたが、本調査に際して多大な御理解と御協力をいただきました地元の方々をはじめ、本報告書を作成するにあたって御指導をいただきました諸先生並びに関係各位に厚くお礼を申し上げます。

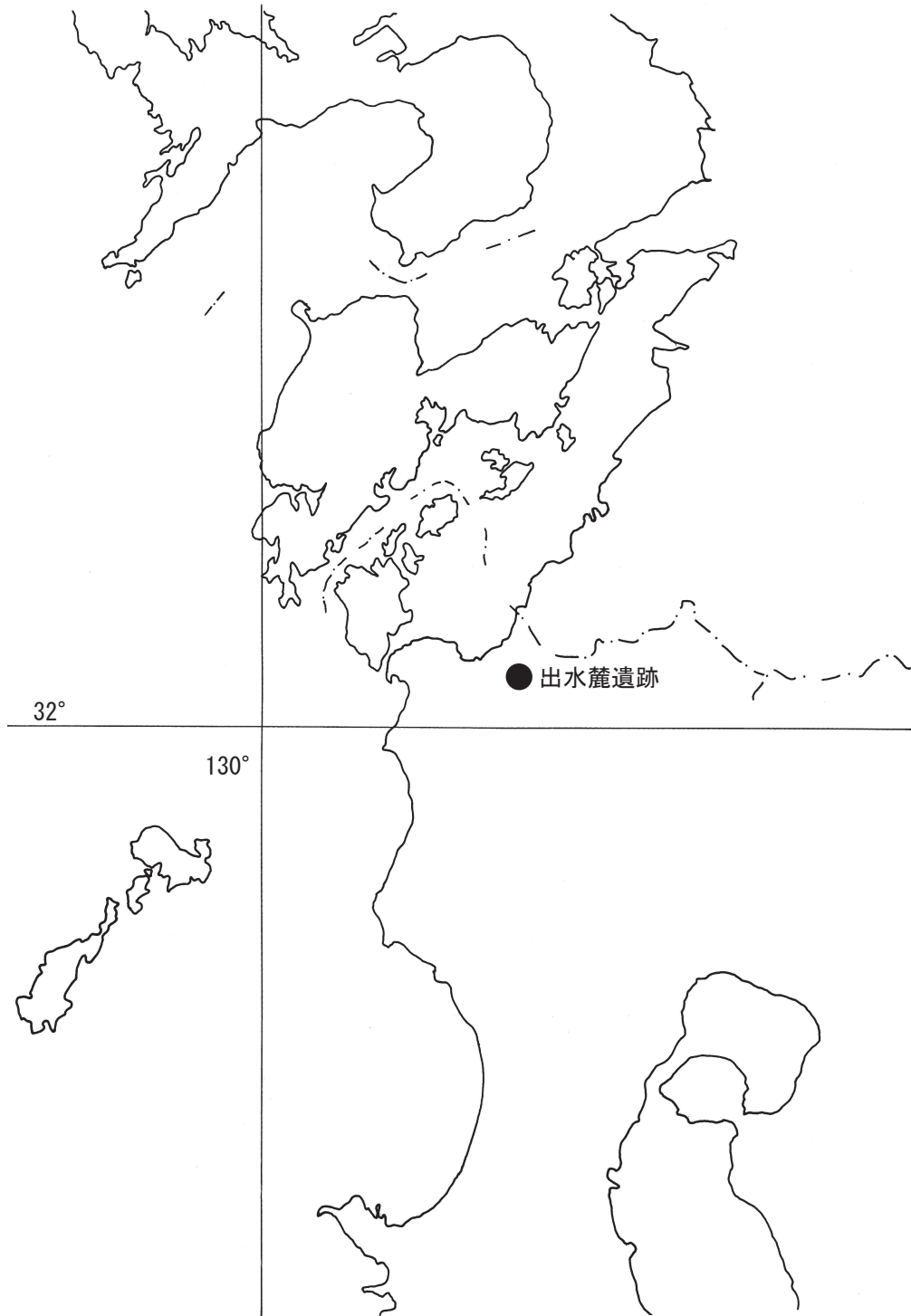
平成 30 年 3 月

出水市教育委員会  
教育長 溝 口 省 三



## 例 言

- 1 本書は、出水ふもと資料館（仮称）建設及び出水小学校 6 号棟改築事業に伴う出水麓遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した各遺跡の所在地は、以下のとおりである。  
出水麓遺跡地頭館地点 鹿児島県出水市麓町 223、224 番ほか  
出水麓遺跡御仮屋地点 鹿児島県出水市麓町 210 番  
なお、出水麓遺跡地頭館跡について、当地に地頭館が所在していたことを示す資料や記録等は現在まで確認されていないが、当地を示す呼称として地元を中心に長らくこの名称で周知されていることから、現地発掘調査及び本書においてはこの遺跡名を使用するものである。
- 3 発掘調査の主体は、出水市教育委員会で、調査担当者は岩崎新輔である。
- 4 出水麓遺跡地頭館地点の発掘調査は、平成 24 年度及び 28 年度に実施し、整理作業は 28 年度に、報告書原稿作成作業は 28・29 年度に実施した。なお、24 年度の確認発掘調査は国の補助を受けて実施した。
- 5 出水麓遺跡御仮屋地点の発掘調査は、平成 25 年度に実施し、整理作業は 28 年度に、報告書原稿作成作業は 28・29 年度に実施した。
- 6 出土した遺物について、鹿児島大学法文学部 渡辺芳郎教授に御指導を賜った。
- 7 本書記載のレベルはすべて海拔高である。
- 8 本書で用いた遺構記号について、S B は坪地業、S K は土坑、P はピット遺構を表す。
- 9 本書記載の遺物番号は通し番号とし、本文・挿図・写真図版に記した番号と一致する。
- 10 全発掘調査の現場各種実測、写真撮影は岩崎新輔が行った。また、報告書に掲載した遺物全点の実測図作成及び遺物観察表作成と遺物実測図の浄書は、岩崎新輔が整理作業員の協力を得て行った。遺構実測図の浄書については岩崎新輔が行った。
- 11 本書収録の三原邸の石垣実測図作成及び製図は、株式会社埋蔵文化財サポートシステム鹿児島支店に委託した。
- 12 本書の本文執筆、編集、図版レイアウト、出土遺物の写真撮影は岩崎新輔が行った。
- 13 発掘調査で得た全ての成果については、出水市教育委員会で保管し、展示・活用を図る予定である。



付図 遺跡位置図

## 報告書抄録

ふりがな	いずみふもといせき			
書名	出水麓遺跡 (3)			
副書名	出水ふもと資料館 (仮称) 建設及び出水小学校 6 号棟改築事業			
巻次				
シリーズ名	出水市埋蔵文化財発掘調査報告書			
シリーズ番号	26			
編著者名	岩崎新輔			
編集機関	鹿児島県出水市教育委員会			
所在地	〒899-0292 鹿児島県出水市緑町 1 番 3 号 TEL (0996)63-2111			
発行年月日	西暦 2018 年 3 月 31 日			
ふりがな 所収遺跡名	いずみふもといせき 出水麓遺跡 (地頭館跡地点)、 じとうかんあと (御仮屋跡地点) おかりやあと			
ふりがな 所在地	いずみしふもとちょう 出水市麓町 (地頭館跡地点 223 番、224 番ほか)、 (御仮屋跡地点 210 番)			
コード	市町村	462080	遺跡番号	8-54
経度	地頭館跡：北緯 32° 04' 31" 東経 130° 21' 33"			
	御仮屋跡：北緯 32° 04' 28" 東経 130° 21' 31"			
調査期間	地頭館跡：確認調査 20130213～20130308 記録保存調査 20160509～20160614			
	御仮屋跡：20131106～20131115			
調査面積 m <sup>2</sup>	地頭館跡：確認調査 99.6 記録保存調査 191.5			
	御仮屋跡：427.6			
調査原因	地頭館跡：出水ふもと資料館 (仮称) 建設			
	御仮屋跡：出水小学校 6 号棟改築事業			
所収遺跡名	出水麓遺跡 (地頭館跡)		出水麓遺跡 (御仮屋跡)	
種別	近世屋敷跡		近世屋敷跡	
主な時代	中世・近世		中世・近世	
主な遺構	柱穴跡、地業遺構、溝状遺構		ピット	
主な遺物	土器、中世・近世陶磁器類、瓦質器、 礫 (盤石)、近現代陶磁器		近世陶磁器、近現代陶磁器	
特記事項	建物建設予定地のうち、記録保存調査未 実施の範囲を調査		旧校舍解体後に確認調査を実施、遺構が確認 されたため調査途中で記録保存調査へ移行	
要約	心空間が約 2.2～2.7 メートルの地業遺構 を 13 基検出、江戸時代の建物跡と考えら れる。同地は近現代に複数回にわたり建物 が建設されたことにより、この建物跡の一部 は消失したとみられる。近世～近現代の陶 磁器を中心に遺物が多く出土した。		旧校舍建物の基礎部は深く掘り込まれ、その 他の箇所もほぼかく乱を受けるなど、近世の建 物遺構等は確認されなかった。しかしながら、旧 校舍跡の掘削等を受けていない隣接箇所から 中世と考えられる時期の遺構が 5 基確認され た。	

# 本文目次

序文

例言

報告書抄録

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至るまでの経緯	1
第2節 発掘調査の組織	2
第3節 日誌抄	3
(1) 地頭館跡地点	3
(2) 御仮屋跡地点	4
第2章 遺跡の位置と環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第3章 調査の概要	9
第1節 地頭館跡の調査	9
(1) 調査目的と方法	9
(2) 層位	9
(3) 概要	12
(4) 遺構	17
(5) 遺物	20
第2節 御仮屋跡の調査	37
(1) 調査目的と方法	37
(2) 概要	37
(3) 遺構	37
(4) 遺物	39
第4章 まとめ	43

## 挿 図 目 次

付 図	遺跡の位置	
第 1 図	周辺の遺跡	7
第 2 図	調査状況図	10
第 3 図	土層断面図	11
第 4 図	遺構検出状況	13
第 5 図	S B 1—S B 6	14
第 6 図	S B 7—S B 13	15
第 7 図	三原邸石垣	16
第 8 図	地頭館跡地点出土遺物	磁器類 (染付 1) 21
第 9 図	地頭館跡地点出土遺物	磁器類 (染付 2) 22
第 10 図	地頭館跡地点出土遺物	磁器類 (染付 3) 23
第 11 図	地頭館跡地点出土遺物	磁器類 (染付 4) 24
第 12 図	地頭館跡地点出土遺物	磁器類 (染付 5) 25
第 13 図	地頭館跡地点出土遺物	磁器類 (青磁、白磁、その他) 26
第 14 図	地頭館跡地点出土遺物	陶器類 1 27
第 15 図	地頭館跡地点出土遺物	陶器類 2 28
第 16 図	地頭館跡地点出土遺物	陶器類 3 29
第 17 図	地頭館跡地点出土遺物	陶器類 4 30
第 18 図	地頭館跡地点出土遺物	瓦類 31
第 19 図	地頭館跡地点出土遺物	古銭 32
第 20 図	地頭館跡地点出土遺物	石製品 33
第 21 図	地頭館跡地点出土遺物	ガラス製品、その他 33
第 22 図	地頭館跡地点出土遺物	その他の遺物 (石器) 34
第 23 図	地頭館跡地点出土遺物	その他の遺物 (土器) 34
第 24 図	御仮屋跡地点調査状況図	38
第 25 図	調査状況図	40
第 26 図	S K 1、P 1—P 4	40
第 27 図	御仮屋跡地点出土遺物	42

## 表 目 次

第 1 表	周辺の遺跡	8
第 2 表	出水麓遺跡地頭館跡	遺構計測表 20
第 3 表	出水麓遺跡地頭館跡	土器類観察表 35
第 4 表	出水麓遺跡地頭館跡	瓦類観察表 36
第 5 表	出水麓遺跡地頭館跡	古銭観察表 36
第 6 表	出水麓遺跡地頭館跡	石器類観察表 36
第 7 表	出水麓遺跡御仮屋跡	遺構計測表 41
第 8 表	出水麓遺跡御仮屋跡	土器類観察表 41

## 図 版 目 次

図版 1	出水麓遺跡航空写真	45
図版 2	出水麓遺跡 地頭館跡地点建物 1 検出状況	46
図版 3	出水麓遺跡 地頭館跡地点遺構検出状況 (1)	47
図版 4	出水麓遺跡 地頭館跡地点遺構検出状況 (2)	48
図版 5	出水麓遺跡 御仮屋跡地点調査状況 (1)	49
図版 6	出水麓遺跡 御仮屋跡地点調査状況 (2)	50
図版 7	出水麓遺跡 出土遺物 (1)	51
図版 8	出水麓遺跡 出土遺物 (2)	52
図版 9	出水麓遺跡 出土遺物 (3)	53
図版 10	出水麓遺跡 出土遺物 (4)	54

# 第1章 調査の経緯

## 第1節 調査に至るまでの経緯

本市には、近世薩摩藩の外城制度により、武士の居住地区である「麓」が形成され、江戸時代末期から昭和の初め頃までに建てられた武家屋敷や武家門等が良好な状態で多数残されてきた出水麓地区がある。この中でも特に重要なものは文化財に指定するなど、その保護を行ってきた。

### (1) 出水ふもと資料館（仮称）建設に係る発掘調査（出水麓遺跡地頭館跡地点）の経緯

出水市は、出水麓の武家屋敷群一帯の整備事業を計画するなかで、平成4年度に麓武家屋敷資料館整備等事業検討委員会を設置し、麓地区に武家屋敷群の中核施設として歴史資料館の建設を計画した。

そこで、出水市は鹿児島県教育庁文化課※〔※当時の名称、現在は文化財課（以下、「県文化財課」という。）〕と協議し、出水麓の整備事業の一環として、平成5年度に資料館建設予定地の出水麓遺跡内の地頭館跡と呼ばれる場所の確認発掘調査を出水市教育委員会（以下、「市教委」という。）が実施することとなった。

その結果、地頭館と推定される場所から礎石、周辺部から石垣と井戸が検出され、いずれも江戸時代の遺構と推定された。この結果に基づき、今後の遺跡の取り扱いについて再度市教委と県文化財課は協議を行い、平成6年度に市教委は記録保存の発掘調査を実施したが、同7年度になって資料館建物の位置が当初の予定地から西側へ変更されたため、同8年度に再び確認調査を実施することとなった。調査の結果、江戸時代の遺構、遺物のほか、古墳時代や縄文時代の遺物等が確認された。この調査の結果、市教委は同9年度に資料館建設地について記録保存の発掘調査を実施することとなった。

また一方で、平成7年に出水麓は国の重要伝統的建造物群保存地区に選定され、その制度により武家屋敷等の修理を行う一方、重要伝統的建造物群保存地区になったことで観光の面においても中核施設となる資料館建設の要望はより高まっていき、同9年度には出水ふもと資料館（仮称）新築工事实施設計が完成した。

ところが平成11年度になって、整備事業の見直しが検討されることとなった。同12・13年度の検討の結果、資料館の必要性は認めるものの、新たな建物の建設は財政事情等を勘案し、当分の間保留とすることとなった。

建設保留後も資料館等建設の要望は続き、平成24年度になって「出水ふもと資料館（仮称）基本構想（案）」が策定され、これにより同28年度を目標に出水ふもと資料館（仮称）を建設することが決定された。

この決定により、市教委は平成24年度に出水麓遺跡の地頭館跡地点及び資料館完成後の周辺整備として散策施設等整備が計画されている隣接する武家屋敷の三原邸内の敷地について、確認発掘調査を実施した。その後の建物実施設計において、記録保存のための発掘調査が必要な箇所があることが同27年度に判明したため、同28年度の工事着工前に記録保存の発掘調査

を行うこととなった。

なお、資料館の正式名称は平成 28 年度の公募により「出水麓歴史館」となった。

## (2) 出水小学校 6 号棟改築事業に係る発掘調査（出水麓遺跡御仮屋跡地点）の経緯

平成 24 年度に出水市教育委員会教育総務課は、出水小学校 6 号棟の改築事業に係る遺跡の有無について同生涯学習課（現在の文化財課、以下「文化財課」という。）に照会した。照会の結果、事業地は出水麓遺跡の範囲のうち藩政期に御仮屋があったとされる地点にあることが判明した。

これを受け、両課で協議した結果、翌 25 年度の旧校舎解体・撤去後の新校舎建設予定地内で確認発掘調査を実施し、遺構等が確認された場合は引き続き記録保存の発掘調査を行うこととなった。

確認発掘調査の結果、遺構が確認されたため途中から記録保存の発掘調査に移行した。

## 第 2 節 発掘調査の組織

### (1) 地頭館跡地点

#### ア 平成 24 年度 出水ふもと資料館（仮称）建設に係る確認発掘調査

調査主体者	出水市教育委員会		
調査責任者	〃	教 育 長	溝口 省三
調査企画者	〃	教 育 部 長	植村 猛
〃	〃	生涯学習課 課 長	園畠 正治
〃	〃	〃	主幹兼文化係長 内之浦 昭
事務・調査担当	〃	〃	主 査 岩崎 新輔

#### イ 平成 28 年度 出水ふもと資料館（仮称）建設に係る記録保存発掘調査

調査主体者	出水市教育委員会		
調査責任者	〃	教 育 長	溝口 省三
調査企画者	〃	教 育 部 長	岩元 亮二
〃	〃	生涯学習課 課 長	盛 正明
〃	〃	〃	参 事 内之浦 昭
事務・調査担当	〃	〃	主 査 岩崎 新輔
調査指導者	鹿児島大学法文学部	教 授	渡辺 芳郎

### (2) 御仮屋跡地点

#### 平成 25 年度 出水小学校 6 号棟改築事業に係る発掘調査

調査主体者	出水市教育委員会		
調査責任者	〃	教 育 長	溝口 省三
調査企画者	〃	教 育 部 長	植村 猛
〃	〃	生涯学習課 課 長	園畠 正治
〃	〃	〃	主幹兼文化係長 内之浦 昭
事務・調査担当	〃	〃	主 査 岩崎 新輔

発掘作業員	井口昇、井上利光、岩下静雄、上原大和、小田幸枝、亀川実、川崎弘子、木下順二、栗毛野繁、黒木教浩、島屋三郎、下野政人、瀬野浦斉晃、田垣峰子、竹添孝一、田中宗恭、谷雅博、土屋充、堤田幸二、中嶋勝志、西牟田修、濱上憲治、深水陸王、堀切博貴、前田薩子、松下伍夫、松下良一、道上利枝子、宮崎拓也、宮脇幸春（50音順）
整理作業員	太田匡也、崎口大、崎元忠彦、園田寛、日置信男、道上利枝子、宮内あり子、山下正満（50音順）

### 第3節 日誌抄

各調査の経過、主な作業内容等を週単位で略述する。

#### (1) 地頭館跡地点

##### ア 平成24年度 出水ふもと資料館（仮称）建設に係る確認発掘調査（H25.2.13-3.8）

2月13日（水）～15日（金）

1～5 トレンチを設定、作業員により掘り下げる。3・4 トレンチから近代のものと思われる土坑検出。トレンチ配置図作成。

2月18日（月）～22日（金）

18日は雨天のため作業中止。6・7 トレンチ設定、作業員により掘り下げる。1・2・6 トレンチからは近現代の遺物に混ざって縄文時代と近世の遺物が出土する。同状況写真撮影。6 トレンチから柱穴跡と見られる遺構検出。

2月25日（月）～3月1日（金）

6 トレンチ遺構精査。板状の礫を伴う柱穴跡であり、建物跡の一部と見られる。7 トレンチから現代遺物に混ざり近世遺物出土。8・9 トレンチ設定、作業員により掘り下げる。1・6 トレンチ土層断面分層、実測図作成作業。1・2・6 トレンチ完掘。トレンチ配置図作成。2月26日の午後と3月1日の一日は雨天のため作業中止。

3月4日（月）～3月8日（金）

10 トレンチ設定、作業員により掘り下げる。7・8・10 トレンチから土坑、地業遺構、ピットを検出。同状況写真撮影。7 トレンチ土層分層、実測図作成作業。トレンチ配置図作成。10 トレンチ遺物出土状況、遺構検出状況写真撮影。全トレンチにおいて、検出された遺構は保護措置をし、その後に埋戻しを行った。

##### イ 平成28年度 出水ふもと資料館（仮称）建設に係る記録保存発掘調査（H28.5.11-6.14）

5月9日（月）～13日（金）

重機により表土除去。作業員による作業開始日に除去された表土から遺物を採集。全面調査区（D3区、E3区）内において残存表土の除去及び土層断面の清掃作業。平成5年度の調査で確認されていた、三原邸敷地内石垣の実測図作成のため覆土除去及び清掃作業。

5月16日（月）～20日（金）

16日は雨天のため作業中止。確認調査未実施地に1～3 トレンチ設定、作業員により掘



り下げる。D・E3区I層掘り下げ。記録保存調査区は近代建物跡検出状況の写真撮影後に掘り下げを進め、近世の遺構と思われるものが検出され、精査作業に入る。1～3トレンチからは遺構等は確認されなかったため配置図等作成後に埋め戻す。三原邸石垣清掃作業。

5月23日(月)～27日(金)

三原邸石垣の実測図作成作業(業者委託)開始。D・E3区II層掘り下げ。H24確認調査時の6トレンチを再掘し柱穴跡を再検出、これをSB1とする。II下～III上層遺構精査の結果、SB2～SB11を新たに検出。各SB検出状況実測図作成及び写真撮影。SB2～SB9半裁調査開始、断面図作成及び写真撮影。

5月30日(月)～6月2日(木)、14日(火)

SB12とSB13を新たに検出、同状況写真撮影及び実測図作成後半裁調査開始。SB1～SB13全掘し記録作業後、同建物跡検出状況写真撮影。D3区の建物跡東側から溝状遺構検出のため埋土掘り下げ。D3区東壁及びE3区西壁土層断面図作成及び写真撮影。溝状遺構完掘状況写真撮影及び遺構検出状況実測図作成。作業員による調査は2日までに終了し、重機による埋め戻しを14日に行い全調査終了。

## (2) 御仮屋跡地点

平成25年度 出水小学校6号棟改築事業に係る発掘調査(H25.11.6-15)

11月6日(水)～8日(金)

(前日までに重機で表土及びカクラン土除去)重機で表土等除去作業後の残存表土等作業員による除去及び埋蔵文化財包含層の有無確認(遺構精査)作業。

11月11日(月)～15日(金)

埋蔵文化財包含層の有無確認(遺構精査)作業。坪地業を3基検出するが、近現代のものと判明。地盤層上面から中世のものと思われる土坑1基と柱穴状遺構3基を検出、同状況写真撮影後に段掘り遺構精査。各遺構各状況写真撮影、実測作業実施。新校舎建設範囲のうち地層残存部(旧校舎基礎部以外)にトレンチを7か所設定し、掘り下げ調査するが遺構遺物等出土無し。トレンチ配置図、各遺構実測図作成。全体発掘調査状況等写真撮影し、重機で埋め戻し現場の発掘調査終了。

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

今回調査した出水麓遺跡は出水市麓町 223 番他に所在する。

遺跡の所在する出水市は、鹿児島県の最北端に位置し、熊本県水俣市に接する県境の市である。

北東部は、矢筈岳 (687m) を中心に輝石安山岩を岩盤とする肥薩山塊がほぼ東西方向に走り、熊本県水俣市及び鹿児島県伊佐市と接する。

南部は、紫尾山 (1,067m) を主峰とする四万十層群と一部花崗閃緑岩よりなる紫尾山地がほぼ南北方向に走り、薩摩郡さつま町及び薩摩川内市と接する。紫尾山は、北薩一の高峰である。

この紫尾山地と、出水平野との境の断層崖下には、シラス台地と高位段丘がある。これに続く大野原町・高尾野町・野田町の一帯は、洪積台地の扇状地で広大に広がっている。この扇状地を囲むように、河岸段丘と沖積地が発達している。

矢筈山地に源を発した米ノ津川と、紫尾山地を源とする平良川は、中流域で合流し、北流して八代海に注ぐ。

平良川及び米ノ津川の左岸には、知識面と呼ばれる河岸段丘が扇状地をとりまくように細長く形成され、中流域では米ノ津面と呼ばれる沖積地が発達する。

なお、下流域では三角洲や海岸平野となり八代海となるが、海岸部は江戸時代以後干拓が行われ、現況の地形を呈す。

西部は、扇状地及び高尾野川、野田川、岩下川（西目川）によって形成された河岸段丘や沖積地で、阿久根市と境を接する。

北西部は、遠浅の八代海を距てて、出水郡長島町及び熊本県の天草諸島を望むことができる。八代海では遠浅を利用した浅草のりの養殖が盛んであり、また、冬には季節風をいっぱいにはらんだ白い帆のケタ打瀬船がクマエビ漁にいそしみ、荒崎の干拓地には、冬の使者、ナベヅル・マナヅルらがシベリアからの長旅を癒すように群舞している。

出水麓遺跡は、北部を米ノ津川、西部を平良川が流れる合流点に突き出すように位置した標高約30m～45mの火山灰(シラス)台地が侵食によって残された丘陵地の扇状部に所在する。また、出水麓地区は17世紀初頭からの薩摩藩独特の外城制度により各地から派遣されて来た武士の住宅地として約60ヘクタールに渡り整備・造成された地区でもあり、出水麓遺跡はその造成地区内にある。

### 第2節 歴史的環境

出水地方は、早くから考古学・古代学・歴史学研究のフィールドとして、学術上重要な地として注目されてきた。

出水市の東部、伊佐市、水俣市と接する標高約 500m の上場高原一帯は、旧石器時代の遺跡が集中し、特に上場遺跡は、始良テフラ(約 2.4 万年前)を境に爪形文土器と細石器の共伴やナイフ形石器、台形石器等を包含する 7 時期の文化層の存在が明らかになった。隣接する伊佐市

日東には、黒曜石原産地が所在する。

縄文時代遺跡の立地は、主に扇頂部及び扇端部の河岸段丘や山麓縁辺、裾部に集中している。早・前・後期の牟田尻遺跡、カラン迫遺跡、中尾Ⅰ・Ⅱ遺跡などがあり、前期の荘貝塚、中期の柿内遺跡や江内貝塚、後期の出水貝塚、晩期の沖田岩戸遺跡、大坪遺跡などがある。

特に出水貝塚は大正9年、京都大学によって本県で最初の貝塚遺跡調査が行われ、戦後の調査によって貝塚下から早期押型文土器が出土し、貝層中部及び貝層上部から中・後期の土器（南福寺式土器・出水式土器）などが出土するほか、埋葬人骨も計7体確認されている。また、江内貝塚でも中期を中心とする遺物や埋葬人骨が出土している。

縄文晩期遺跡では、沖田岩戸遺跡、尾崎B遺跡、大坪遺跡、前原遺跡などがあり、いずれの遺跡も発掘調査が行われ、出水地方の考古学研究に大きな成果をあげている。

弥生時代遺跡では、堂前遺跡や下高尾野遺跡があり、これらの遺跡により、弥生時代中期の覆石墓から後期の葺き石土壙墓、さらに古墳時代の地下式板石積石室へと移行する埋葬形態の変遷を知ることができる。弥生時代終わり頃の埋葬跡では、箱式石棺の形態を持つ石棺が境町切通に出現する。

古墳時代遺跡では、洪積台地縁辺にある、短甲が出土した溝下遺跡（溝下古墳群）や、隣接する下郡山遺跡からは数基の竪穴状遺構が検出されている。また、八代海と東シナ海をつなぐ黒ノ瀬戸海峡によって隔てられた長島には、5世紀から7世紀にかけて高塚古墳が出現する。

出水の地名が文献資料に初めて確認されているのは続日本記で、宝亀9年（778年）に遣唐使船が着いたという出来事を「遣唐使船第二到泊薩摩国出水郡」と伝えている。

中世には、元暦2年（1185年）に島津荘下司職に補任された島津忠久が守護被官本田貞親に木牟礼城を築城させた。また、享徳2年（1425年）に島津用久が薩州家を興すと、出水城を拠点とし約140年間出水地方を治めることとなる。遺跡では、権威の象徴である「龍首水注」が出土した中郡遺跡群や、規模が大きく良好な山城遺構が残る出水城跡や亀井山城跡がある。

近世には、島津家の外城制度の下に藩境地としての政治的要所の性格を強め、藩内外から派遣された郷士が居を構える。そして、県内でも最大規模の武家屋敷等の集中地である「麓」を形成するに至った。出水麓地区は、市街地の南部に所在し、地区内の道路は格子状に整然と区画され、各家々の周りには石垣・生垣が巡らされ、敷地内には畑を広くとるなどして作られている。この敷地一区画ごとが「砦」や「廓（曲輪）」のような性格を持っており、「麓」の歴史的な背景を裏付けるものである。遺跡では、藩政期の建物跡が検出された出水麓遺跡や、薩摩街道出水筋の肥後との国境付近にあった笹原茶屋跡などがある。

近現代には、第二次世界大戦時に旧海軍により出水航空基地が建設された。この基地を中心に関連施設が平和町や高尾野町に建設された。この時の関連施設のうち、今でも戦争遺跡として残されているものは、上記基地跡や掩体壕など、およそ30箇所が確認されている。出水航空基地跡一帯は今でも基地の痕跡を示すように道路・街区が方形の形状を残している。





第1表 周辺の遺跡

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺構、遺物等	調査履歴等
1	出水麓	麓町堅馬場	台地	中世～江戸	柱穴跡、地業跡、ピット、陶磁器	H5・6・8・9・21・24・25・28年確認・全面調査
2	出水麓 (旧税所邸)	麓町堅馬場	台地	江戸	柱穴跡、厠跡	H21年確認・全面調査
3	乙五郎	上鯖淵大田	山腹緩斜面	旧石器		遺物採集地
4	松尾城跡	上鯖淵松尾	丘陵地	縄文、中世	曲輪、掘立柱建物、腰郭、大手空堀、土師器、青磁、上村氏居城	H9年確認、10年全面調査
5	宮ノ脇	上鯖淵松尾	低地	弥生	石器	遺物採集地
6	太田城跡	上鯖淵太田	丘陵地	中世	水の手	
7	通山口	上鯖淵香月	山腹緩斜面	旧石器		遺物採集地
8	井手ノ原	上鯖淵渡瀬口	河岸段丘	縄文、古墳	土器	H9年北薩分布調査
9	井ノ上城跡	上鯖淵井上	丘陵地	中世	腰郭、水の手、和泉氏・井口氏居城	H14年確認調査
10	御所園原	上鯖淵井之上	台地	縄文	土器、黒曜石	H9年北薩分布調査
11	鯖淵	上鯖淵井之上	河岸段丘	縄文、中世	押型文、黒曜石、青磁	H9年北薩分布調査
12	水天上	麓町山崎	台地	縄文、古代	土器、黒曜石、土師器	H9年北薩分布調査
13	上ノ原	武本鍋野	丘陵地	縄文、奈良平安		遺物採集地
14	松ヶ迫	武本鍋野	丘陵地	旧石器～縄文	石器	H10年確認調査
15	出水城跡	麓町7,325	丘陵地	中世	空堀、腰郭、大手、搦め手、和泉氏・肝付氏・鳥津氏居城	H13年確認調査
16	見性庵跡	麓町上堅馬場	丘陵地	室町		薩州島津家の墓・位牌あり
17	大通寺跡	武本西ノ口	丘陵地	室町		薩州島津家第6代義虎菩提寺
18	小松	武本小松	丘陵地	縄文	黒曜石	H10年確認調査
19	龍光寺跡	武本西ノ口	丘陵地	室町～明治3		1459年建立
20	専修寺跡	向江町平良馬場	河岸段丘	室町～明治3		薩州島津家第5代実久設立
21	内城跡	中央町八坊	河岸段丘	中世	平城氏居城	
22	田中	中央町八坊	河岸段丘	弥生	弥生土器、須恵器	
23	成願寺	中央町八坊	河岸段丘	弥生～古墳、安土桃山	箱式石棺、土師器、須恵器	発掘記録なし
24	一町樋	中央町八坊	河岸段丘	古墳	土器	H9年北薩分布調査
25	出水貝塚	中央町尾崎	舌状台地	縄文(早・中・後)	押型文、阿高式、南福寺式、出水式、貝輪、玉製品、人骨、集石、石錘集積	T9年、S28・29年、H8～10年いずれも学術調査
26	新村B	文化町横尾	台地	古代	土師器	H7年確認調査
27	尾崎A	中央町表郷西	台地	縄文(後・晩)、古代、中世、近世	縄文晩期土器、土師器、須恵器陶磁器	H5・6年確認・全面調査
28	尾崎城跡	中央町尾崎	舌状台地	中世	水の手、掘立柱建物跡、知色氏・鳥津氏居城	H8～10年学術調査
29	表郷東	中央町表郷東	台地	中世		遺物採集地
30	天神原	中央町表郷東	台地	古墳	土器	H9年北薩分布調査
31	成願寺跡	中央町八坊	台地	安土桃山～江戸		1633年焼失
32	並松	中央町表郷東	台地	古墳、古代	土器	H9年北薩分布調査
33	塚込	中央町西町	台地	古墳	土器	H9年北薩分布調査
34	山王西	五万石町石坂	台地	古墳	土器、土師器	H9年北薩分布調査、詳細分布
35	東野添	武本野添	台地	古代～中世	土師器、青磁、陶器	H17年度市内分布調査
36	田畑町	武本野添	台地	縄文～古代	縄文土器、土師器	H17年度市内分布調査
37	武本大坪B	武本下中	河岸段丘	縄文～古代	縄文晩期土器、黒色土師器	H17年度市内分布調査
38	栢山	武本下中・上屋	台地	縄文～古代	黒曜石、成川式土器、土師器	H17年度市内分布調査
39	武本大坪	武本下中	河岸段丘	古墳	土器	H9年北薩分布調査
40	老神	武本上中	河岸段丘	縄文～平安	竪穴住居跡、甕、甕形土器	H4年全面調査
41	市来	武本上中	河岸段丘	縄文～平安	弥生土器、土師器、須恵器	H4年全面調査

## 第3章 調査の概要

### 第1節 地頭館跡の調査

#### (1) 調査目的と方法 [第2図]

平成24年度に実施した確認発掘調査は、平成5・6・8・9年度に実施した確認及び記録保存発掘調査終了地以外の資料館建設予定地と駐車場予定地（地頭館跡西側）及び散策施設等整備計画予定地（三原邸敷地内）を対象として合計10トレンチを設定して実施した。

第1～4トレンチは駐車場予定地に、第5・6トレンチは資料館建設予定地に、第7～10トレンチは散策施設等整備計画予定地にそれぞれ設定した。いずれも掘削は作業員によって行った。確認発掘調査の結果、第6トレンチで板状の礫を底部に敷いた坪地業遺構が検出された。このほかに、近世の遺構と明瞭に判別しうるような遺構は確認されなかった。また、ほぼ全てのトレンチから近・現代遺物の出土を伴う土坑や大型円形土坑遺構等が検出されているが、資料館の建設予定地以外は確認調査時点での整備計画においては現地保存が可能と判断し、そのまま埋め戻している。

平成28年度に実施した記録保存発掘調査は、前述した第6トレンチの周辺部で未調査区のD3区とE3区が対象になるが、未調査地点をより詳細に遺跡の有無判断を行うため、補充的に確認発掘調査を追加し、記録保存発掘調査と並行して実施した。駐車場予定地に第11・12トレンチを、資料館建設予定地に第13トレンチを新たに設定し作業員により掘削を行った。これら新設のトレンチからは近世及びそれ以前の遺構等は検出されなかった。記録保存発掘調査区の設定は、平成6年度の記録保存調査で設定したグリッドとした。

なお、駐車場予定地と散策施設等整備計画地の三原邸敷地との境界の一部に石垣が残存している。この石垣について調査時点では整備計画は未定であるが、今後の整備計画の変更において現地保存が困難となることも想定されること、また、石垣上位にある樹木の営為活動や強風による倒木等により破壊される恐れもあることから早期に現状を記録するため測量実測図を作成することとした。

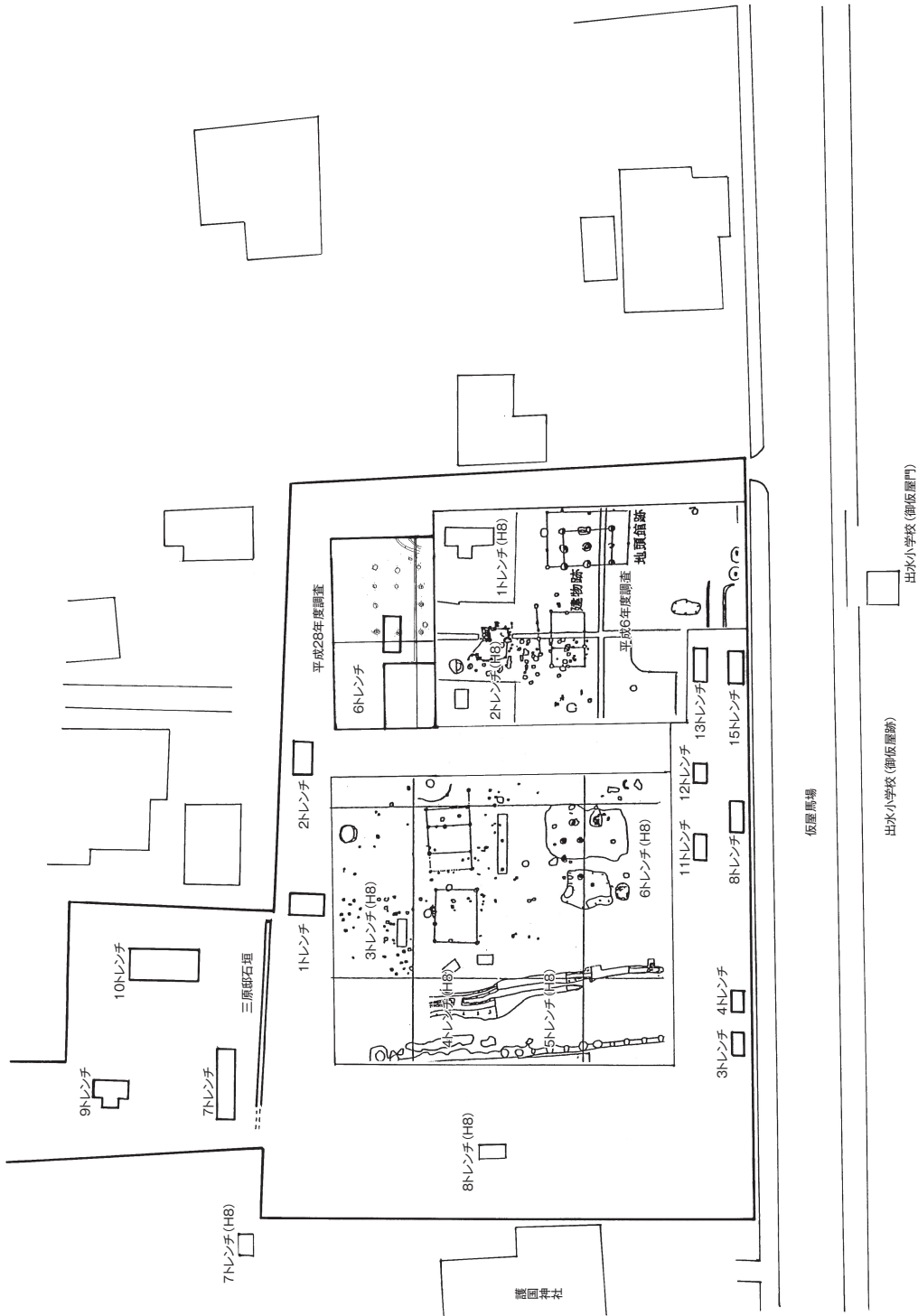
記録保存発掘調査区及び石垣遺構前面部の掘削は、表土及びカクラン層部分は重機により行い、これより下位は作業員によって行った。追加の確認発掘調査の掘削は作業員によって行った。

#### (2) 層位 [第3図]

本遺跡の基本層位は、第1トレンチで検出された地層に代表される。

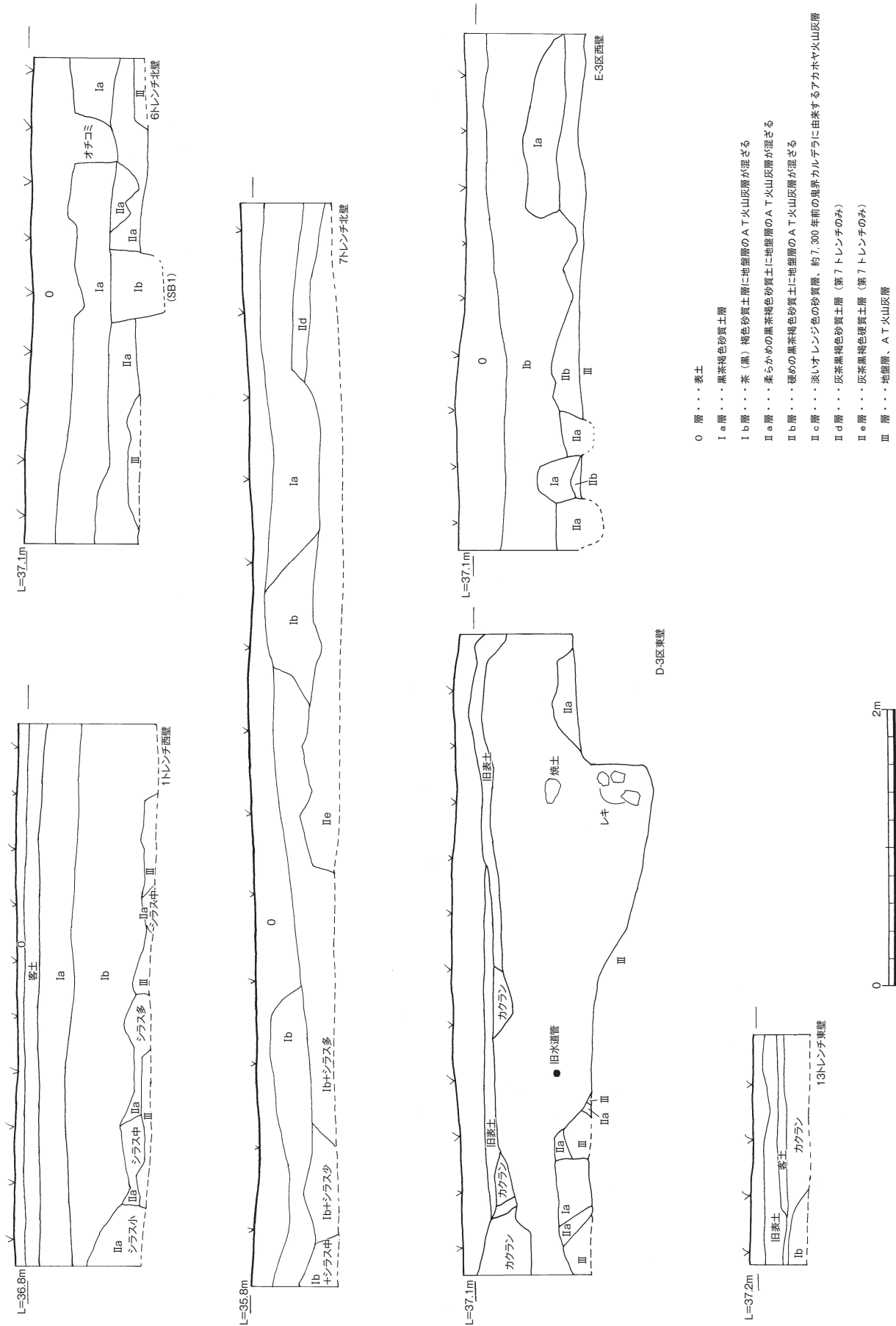
表土等下位は黒茶褐色砂質層のIa層があり、茶（黒）褐色砂質層のIb層に続く。このIb層は堆積状況や、第6トレンチでは地業遺構の埋土に見られることから出水麓造成時のものと考えられる。

II層は出水麓造成以前の旧地層に由来するものと見られ、平成8・9年度の調査では縄文時代晚期土器や古墳時代の土器が出土している。第6トレンチのみ観察されたIIc層は、淡いオレンジ色の砂質層であることから、約7,300年前の鬼界カルデラ噴火により堆積したアカホヤ火山灰層



第2図 調査状況図





第3図 土層断面図



に比定される地層と見られる。

Ⅲ層はやや硬質の淡黄灰色砂質層で、A T火山灰層に比定される地層とみられる。本遺跡及び周辺地の地盤層と見られる。

### (3) 概要 [第2図]

#### ア 確認発掘調査

1 トレンチからは、円形土坑が2基検出され、近世から現代の遺物が出土した。土坑はⅢ層上面で検出された。土坑は半掘調査を行ったが時代・性格等を特定しうる材料が無く詳細不明である。遺構はこれ以上掘削を行わずトレンチはそのまま埋め戻した。

2 トレンチからは、遺構は検出されなかった。近世から現代の遺物が出土した。

3・4 トレンチからは、大型円形土坑が検出された。半掘調査し、土坑は地盤層を円筒形に掘り込んで作られていることが判明した。埋土からは近現代の遺物のみ出土し、この付近には産業関連の建物があったことと道路に面した地点でもあることからその門柱跡などが考えられる。

5 トレンチからは、旧保育園時の砂場跡が検出されたため、掘り下げはこの時点で中止した。

6 トレンチからは、坪地業遺構が1基検出された。検出面はⅡ a層で底部近くからは板状の礫が敷かれた状態で2点出土した。調査期間終了近くでの遺構検出であったため、トレンチを拡張し別の坪地業遺構を確認するまでには至らなかったが、トレンチ周辺部には同様の規模・性格の坪地業遺構の存在が予想され、それはこの地点に坪地業の基礎を持つ近世の建物跡があることを示していると考えられた。

7 トレンチからは、大型土坑の一部が落ち込み状の地形と思われるものを検出したため、サブトレンチを設定し一部を掘削したところ、遺構を示すような掘り込み跡等は確認されなかったため自然の落ち込み地形と思われる。遺物は近世から現代の遺物が出土した。

8 トレンチからは、Ⅲ層の地盤層と同一面に帯状の黒色土層の地点を検出したため、サブトレンチを設定し一部を掘削したところ、遺構を示すような掘り込み跡等は確認されなかったため自然の落ち込み地形か、以前この地点にあった果樹の撤去跡と思われる。遺物は近現代のものが多く出土した。

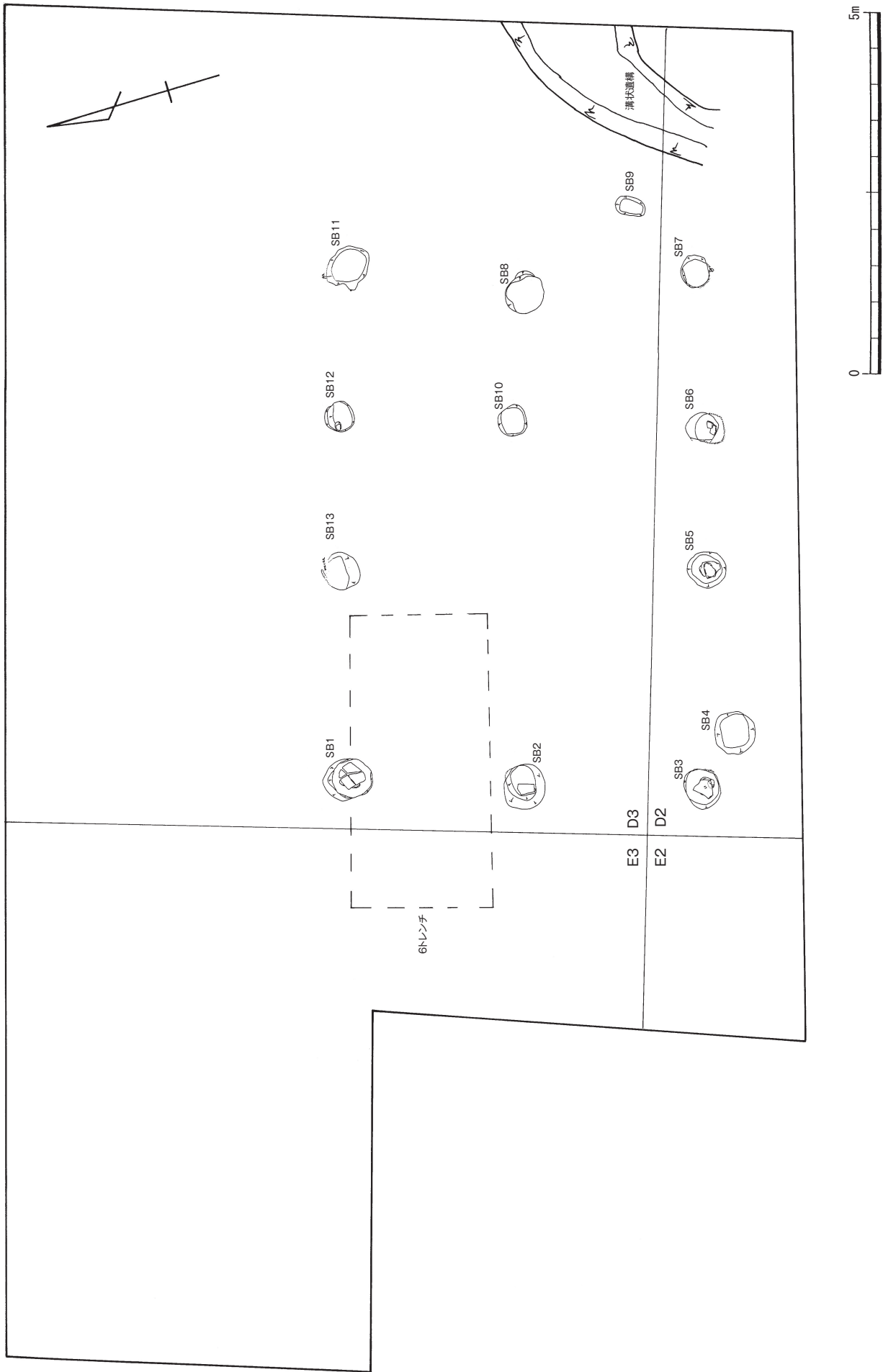
9 トレンチからは、表土付近で掌大の礫が数点から十点程度集積した地点を3箇所検出した以外に遺構は確認されなかった。近世から現代の遺物が出土した。

10 トレンチからは、土坑が1基とピットを13基検出した。いずれも表土下位はⅢ層の地盤で、この面で検出されている。各遺構が作られた時期は、それを特定する掘り込み跡が残されていると考えられる表土下位のⅠ・Ⅱ層が消失していることから特定は困難であるが、これまでの発掘調査の成果から、土坑については近世の坪地業が、ピットについては中世期の柱穴跡の可能性が高いと考えられる。遺物は近世から近現代のものが出土した。

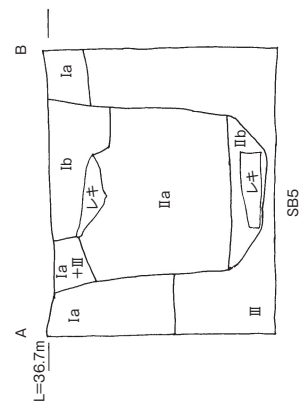
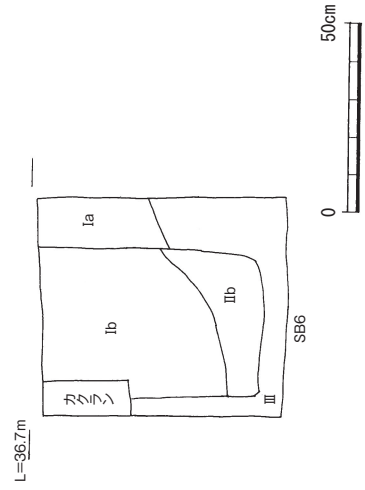
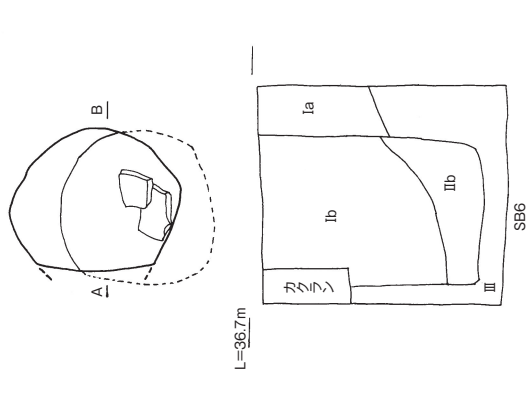
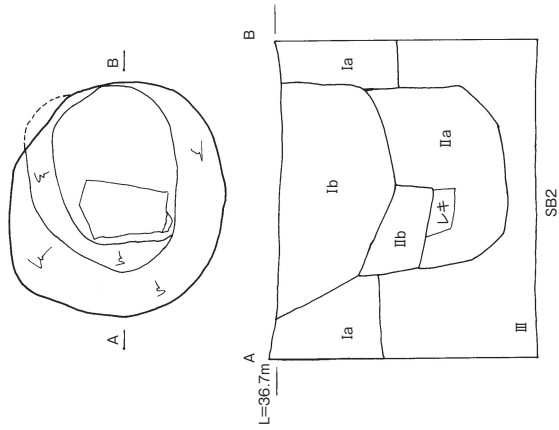
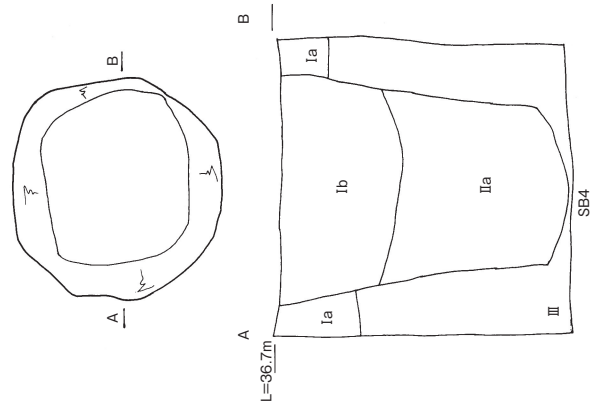
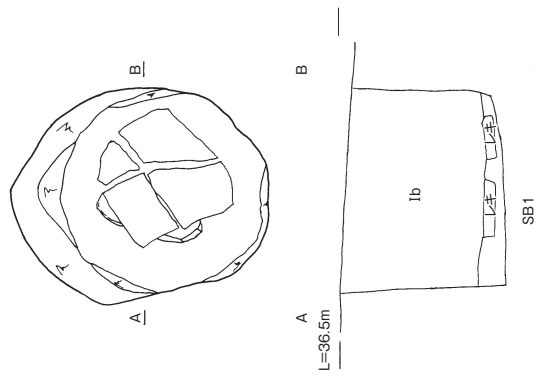
11～13 トレンチからは、遺構は検出されなかった。遺物は現代のものが多く出土した。

#### イ 記録保存発掘調査

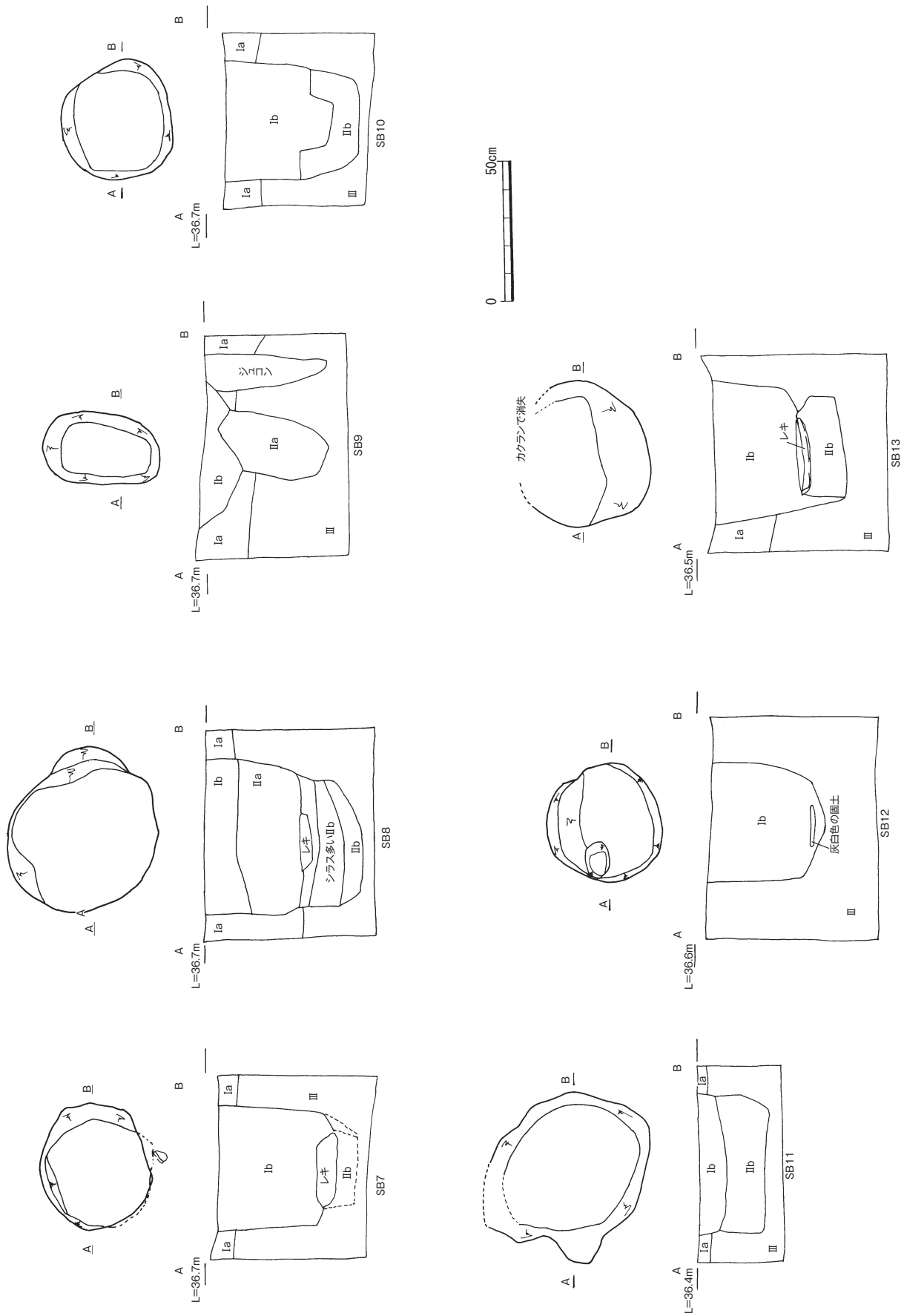
調査区は、平成6年度の記録保存調査時には現代に建設された住宅があった場所で、調査対象



第4図 遺構検出状況

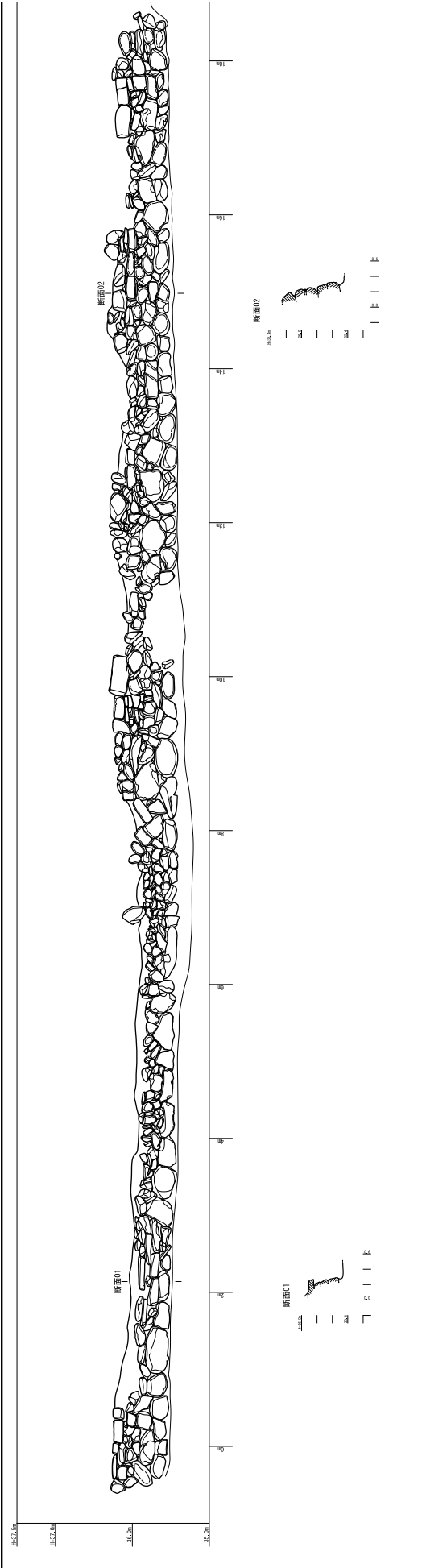


第5図 SB1-SB6

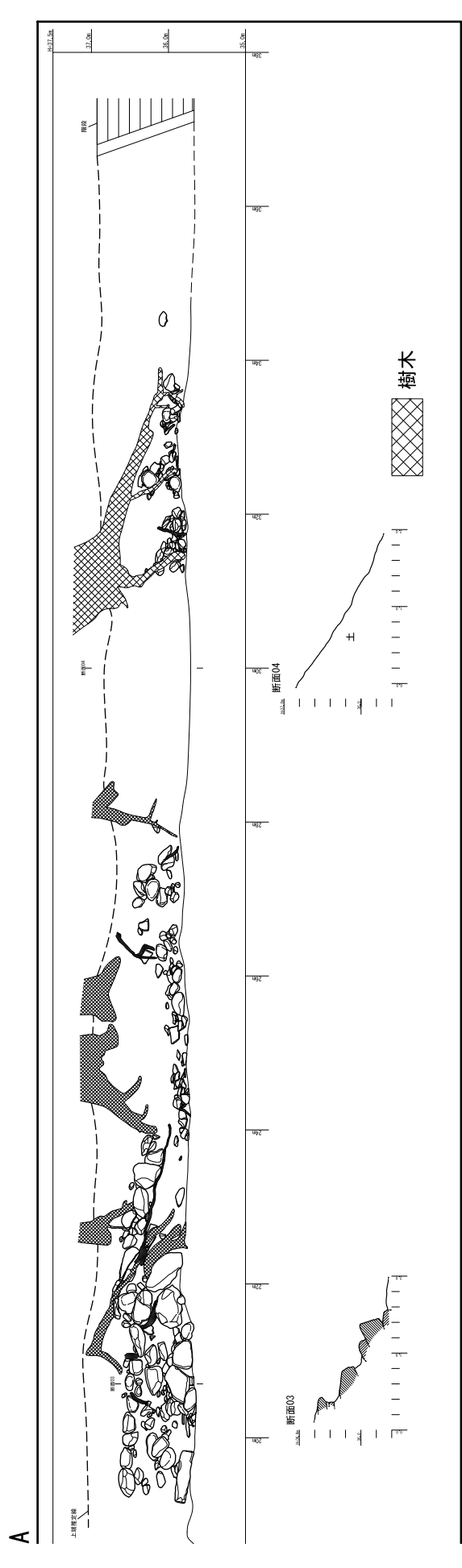


第6図 SB7-SB13

A



A'



A'

第7図 三原邸 石垣

外の地点であったため未調査となっていた。以前の発掘調査の成果と確認調査で坪地業が検出されたことから近世の建物跡があることが予想されたが、上記住宅やそれ以前の建物等の影響により遺跡が焼失されていることも同時に予想された。

現代の遺物やカクランされた土層を確認しながら重機で表土から掘削し、現代遺物の出土が無くなり I 層らしき地層が僅かでも確認された箇所から作業員での掘削を始めた。現代住宅跡に関連する工事跡について、作業員で除去可能なものは除去し、不可能なもの（コンクリート製の大型貯め枘、便所施設など）はそのまま放置した。

### ウ 三原邸石垣の調査

この石垣は、平成 5 年度の確認発掘調査時に発見されている。石垣の南側は三原邸敷地より 1.5 メートル程度高くなっている。現在は広場となっているが、以前は果樹園やたばこの専売公社等の施設があったところである。郷土史家の田島秀隆氏作製の出水外城麓郷土屋敷図の想定復元図によると 4 軒の郷土屋敷の境界部分に比定されている。

この南側の広場と石垣を含む三原邸の庭園部については将来的に散策施設等の整備が計画されているが、現況のまま散策施設の一部として保存・活用されるかどうかは現時点では未定であること、また、石垣の西側半分ほどは大半が消失しているものの、中世から藩政期にかけての遺物等が散見、採集されることから石垣全体について実測図を作製し、遺物等の採集を目的とした記録保存調査を実施することとした。

## (4) 遺構

### ア 建物 1 [第 4 図、第 2 表]

確認発掘調査時の第 6 トレンチ及び記録保存発掘調査時の D2・D3 区において坪地業を基礎に持つ建物跡が検出された。

検出された坪地業は、合計 11 基で最近まで同地にあった住宅基礎部等の工事による破壊を免れたものが残存、検出されたものとみられる。また、平成 6 年度の記録保存発掘調査時に検出された建物跡との連続性や、この付近の地点で検出された独立した柱穴跡や坪地業との関連も見られないことから、これまでの発掘調査で得られた成果には無い、新しく確認された建物跡と見られる。

梁行はおよそ南北方向で、SB1-SB2-SB3 間、SB12-SB10-SB6 間及び SB11-SB8-SB7 間の心心距離はそれぞれ約 2.4 メートルを測る。SB13-SB5 間には、前記 3 つの梁行に見られる中間の坪地業は、念入りに精査したが遺構は検出されなかったものの、この 2 基の心心距離は約 5.0 メートルを測り、他の 3 つの梁間と同じ長さと考えてよいと思われる。

桁行はおよそ東西方向で、SB1-SB13 間、SB3-SB5 間の心心距離はそれぞれ約 2.7 メートルを測る。また、SB13-SB12 間、SB5-SB6 間の心心距離はそれぞれ約 2.2~2.3 メートルを測り、SB12-SB12 間、SB10-SB8 間、SB6-SB7 間の心心距離はそれぞれ約 1.8~2.1 メートルを測る。

坪地業と明確に断定できない SB4 と SB9 については、梁・桁とも列から外れる位置にある。

S B4 については、深さが他の坪地業よりも若干深く、栗石や根石等の礫が埋土中や底面から出土しなかった。S B9 については、検出時は長・短径が約 51 センチメートルの円形を呈していたが、最終的には楕円形の柱穴跡もしくはピット遺構の様相を呈してきた。礫の出土も無く掘込面が消失しているため詳細は不明である。この 2 基の遺構については、建物 1 とは別の時期、性格のものとも考えられる。(なお、本書においてはこの 2 基とも便宜上、S B の遺構記号で表記することとした。)

#### イ 坪地業 [第 5 図・第 6 図、第 2 表]

S B1 は、検出時の長径は 66 センチメートル、短径は 50 センチメートル、埋土を除去した完掘時の深さは 30 センチメートルである。掘り込み面は消失しており当初の深さよりは浅くなっている。断面は円筒形で底部に板状の礫が敷き詰められている。

S B2 は、検出時の長径は 62 センチメートル、短径は 56 センチメートル、埋土を除去した完掘時の深さは 60 センチメートルである。断面は台形で埋土中の中位に板状の礫が 1 点と、白磁片が 1 点出土した。

S B3 は、検出時の長径は 57 センチメートル、短径は 47 センチメートル、埋土を除去した完掘時の深さは 61 センチメートルである。断面は台形で他の坪地業より若干深めに掘られている。

S B4 は、検出時の長径は 58 センチメートル、短径は 56 センチメートル、埋土を除去した完掘時の深さは 77 センチメートルである。断面は台形である。S B4 は、他の坪地業とは検出時の平面形状や規模、掘り込みの形状は類似しているが、栗石や根石などに使用したと思われる礫の出土は無く、埋土も軟らかめのものであり若干深く掘り込まれている。付近にはこれと対を成したり、組み合わせて構成されるような他の建物跡も無いことから、S B3 を作るときに位置を間違っただけで掘ったものが S B4 で、これを修正した位置に作られたものが S B3 であることも考えられる。ただし、埋土は他の坪地業の堆積の仕方が類似しており、ただ埋め戻すだけであるならば埋土はカクラン状態で堆積することが一般的には想定されるという疑問は残る。

S B5 は、検出時の長径は 52 センチメートル、短径は 50 センチメートル、埋土を除去した完掘時の深さは 57 センチメートルである。断面は台形である。埋土上位と硬く締まった埋土の底面部から礫が 1 点ずつ出土している。遺物は瓦質器の皿片が 1 点出土している。

S B6 は、検出時の長径は 45 センチメートル、短径は 38 センチメートル、埋土を除去した完掘時の深さは 58 センチメートルである。断面は円筒形である。底面部の埋土は硬く締まっており、板状の礫が 2 点出土した。遺構の一部は後世に切られて消失している。

S B7 は、検出時の長径は 45 センチメートル、短径は 40 センチメートル、埋土を除去した完掘時の深さは 43 センチメートルである。断面は円筒形である。底面部から板状の礫が 1 点出土し、この礫下位の埋土は硬く締まっている。

S B8 は、検出時の長径は 54 センチメートル、短径は 52 センチメートル、埋土を除去した完掘時の深さは 56 センチメートルである。断面は台形である。底面部から板状の礫が 1 点出土し、この礫下位の埋土は硬く締まっている。

S B9 は、検出時の長径は 51 センチメートル、短径は 51 センチメートル、埋土を除去した完掘時の深さは 43 センチメートルである。断面は円筒形である。建物の項でも述べたが、掘込面は消失



して詳細は不明だが、掘込の形状や埋土の堆積状況など他の坪地業と異なる点が多く、同一の建物記号の遺構番号を付したが、この建物を構成したり付随する遺構の可能性は低いものと思われる。

S B10は、検出時の長径は46センチメートル、短径は45センチメートル、埋土を除去した完掘時の深さは46センチメートルである。断面は台形である。埋土の断面は下位のⅡb層が凹形状を呈しており、非常に硬く締まっている。根石は出土しなかったが、元々は根石があったか、この硬く締まった状態で基礎受けの用を成していたことも考えられる。

S B11は、検出時の長径は55センチメートル、短径は49センチメートル、埋土を除去した完掘時の深さは22センチメートルである。断面は円筒形である。掘込面は消失している。底面部の埋土はやや硬い程度であり礫等も出土せず、他の坪地業の硬く締まり礫等が設置される底部付近のつくりとは若干違いがある。

S B12は、検出時の長径は43センチメートル、短径は41センチメートル、埋土を除去した完掘時の深さは40センチメートルである。断面は円筒形である。埋土の下位、底面部付近の一部に厚さ2センチメートル程度の灰白色の硬土層が検出された。この硬土層の成分等は不明であるが、その検出された位置や状況から、他の坪地業に見られるような板状の礫と同じ目的、用途で設置されたものとも考えられる。

S B13は、検出時の長径は51センチメートル、短径は47センチメートル、埋土を除去した完掘時の深さは46センチメートルである。断面は台形である。底面部から板状の礫が1点出土し、この礫下位の埋土は硬く締まっている。

#### ウ 溝状遺構 [第4図、第2表]

D2区からD3区にかけて検出された。遺構検出状況としては、地盤層表出作業時に茶褐色土層が帯状に検出されたためこれを横断するサブトレンチを設定し、埋土を掘り下げたところ、底部が谷状にすぼまる形で検出された。D2区の掘り込み端部は明確には掘り込まれておらず、緩やかにD3区へ行くにつれ深く掘り込まれていく。調査期間の最終段階であったため、各ポイントでの詳細な断面図を作成できなかったが、本書第3図、D3区東壁の土層断面実測図中、北側から南側に向かって緩やかに掘り込まれるが、掘り込み地点から約1.6メートル付近で直角に立ち上がる壁面の様子が見て取れる。埋土中には、古墳時代や中世の時期の土器等のほか、手掌～人頭大の礫が十数点が出土している。

#### エ 三原邸石垣 [第7図]

遺構は、東側半分と西側半分で様相を全く異にしている。

東側は、出水麓で最も代表的な積み方である野石乱積みにより構築されている。端部付近では、最下部に横長の巨礫を設置し、上位に小～中礫を積んでいる箇所が見られる。中間部から西側にかけての最下部には、横長の居礫はあまり使われていない。また、石垣最上部は全面に渡り消失していると見られる。

これに対して西側は、石垣に使用されたと見られるような礫や、中世から近・現代にかけての遺物の散布が見られた。断面の形状も石垣部は直角に近い角度であるのに対して、この地点は45度く



第2表 出水麓遺跡地頭館跡 遺構計測表

挿図	調査区	遺構	計測値 (単位: cm)			形状			遺物、備考
			長径	短径	深さ	検出面	底面	断面	
5	D3	SB1	66	50	(30)	円形	円形	円筒	確認調査第6トレンチ、礫5 (根石)
5	D3	SB2	62	56	60	円形	円形	台形	礫1 (栗石)、白磁1
5	D2	SB3	57	47	61	円形	楕円形	円筒	礫2 (根石)、鉢類1
5	D2	SB4	58	56	77	円形	円形	台形	坪地業ではない?
5	D2	SB5	52	50	57	円形	円形	台形	礫1 (栗石)、瓦質器皿1
5	D2	SB6	45	(38)	58	円形?	隅丸方形	円筒	一部後世建物基礎切り合う、礫2 (根石)
6	D2	SB7	45	40	43	楕円形	円形	円筒	礫1 (根石)
6	D3	SB8	54	52	56	円形	円形	台形	礫1 (根石)
6	D3	SB9	(51)	(51)	(43)	円形	楕円形	円筒	上部 (掘り込み面) 消失
6	D3	SB10	46	45	46	隅丸方形	円形	台形	凹形状の硬土層
6	D3	SB11	55	49	(22)	楕円形	楕円形	円筒	上部 (掘り込み面) 消失
6	D3	SB12	43	41	40	円形	楕円形	円筒	薄い灰白色硬土層あり
6	D3	SB13	51	47	46	楕円形	隅丸長方形	台形	礫1 (根石)
4	D2-D3	溝状遺構	-	-	(40)	带状	带状	台形	古墳時代土器、中世遺物、礫など

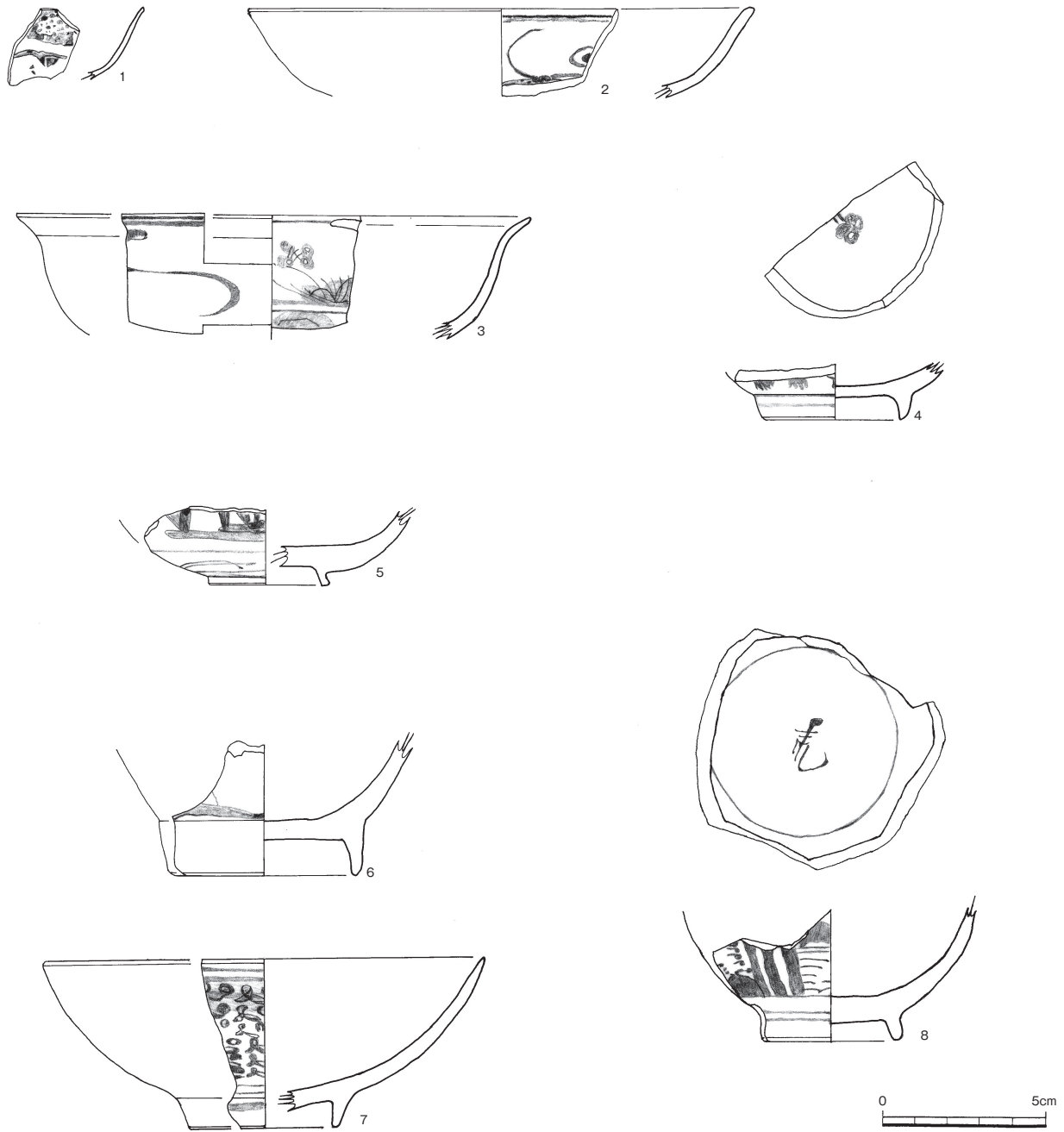
らの斜面である。これらの状況から西側半分の箇所は、元々郷土屋敷地の境界付近ではあったものの、石垣は構築されず、後世になって石垣の南側に当たる土地の造成・整地工事等により、東側石垣の上位部を含む土砂や遺物等がこの地点へ移動 (投棄) されたものと考えられる。

## (5) 遺物

### ア 磁器類 [第8図～第13図、第3表]

1～37は磁器類である。1～26は染付、27～37は青磁・白磁・その他磁器類である。

1は小型の坏である。薄手酒坏うすでしゅはいと呼ばれるもので、江戸で多く見られるほか、富裕層・武家層が所持していることが多い。2・3は皿である。4は碗の底部で中国製のものを模倣した肥前産のものである。5は高台が小さく低い碗の底部である。6は広東形の碗である。7は碗である。8・9は薩摩さんのもので、8は端反りの碗で山・農村風景が描かれる。9は高い高台脚部を持つ広東形の碗である。10は清朝期のものを模倣した素描で肥前産の碗底部である。11は染付風文様の近・現代の茶碗である。12は肥前産の皿である。13は肥前産の碗である。14は見込みに山水文が描かれる鉢である。15は中国製の皿である。16は肥前産の皿である。17は薩摩産の皿である。18は波佐見産の皿である。19は肥前産の鉢である。20・21は肥前産の大皿の破片で、富裕層が所持する宴席用のものである。22は肥前産の色絵とよばれるもので、大型の鉢の蓋である。23は肥前産の皿である。24～26はいずれも宴席用の大皿で、24は肥前産のもので見込みに風景画が描かれる。25は漳州窯しょうしゅうようのもので鳥類 (雉?) の尾のようなものが描かれている。26は肥前産のものである。27は連弁文のある青磁の碗である。28は坪地業の埋土から出土した薄手の白磁碗である。29は口縁部が端反りする小型の白磁碗である。30は胎土が乳濁色の白薩摩で、小型の碗である。31は外面に草文らしき文様が描かれているが退色し詳細は不明の肥前産の磁器碗である。32は連弁文のある青磁の碗である。33は青磁の鉢で大きめの連弁文が見られる。34は青磁の端反りする口縁部を持つ鉢で、貫入や連弁文は見られない。35は口唇部がやや外反する小型の皿である。外面に文様跡が見られるが詳細は不明である。36は龍門寺窯の皿である。37は肥前産の青磁の瓶で花瓶と見られる。

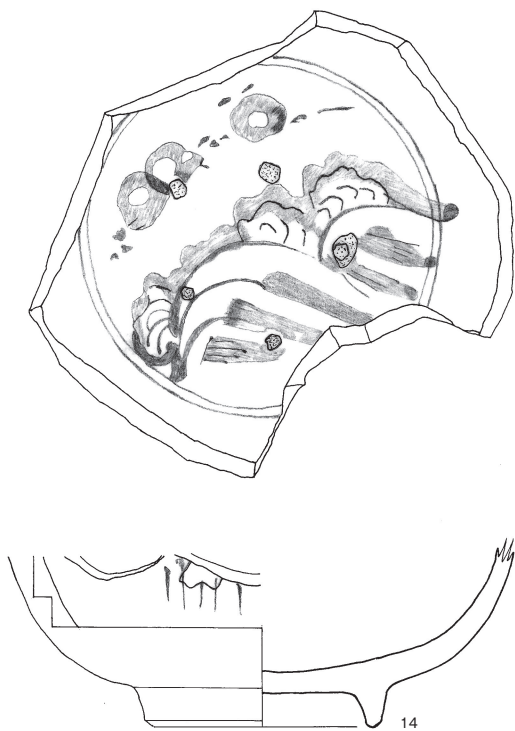
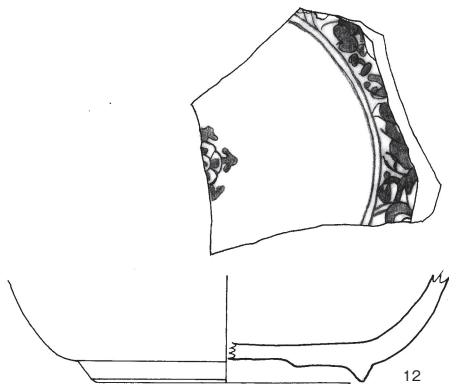
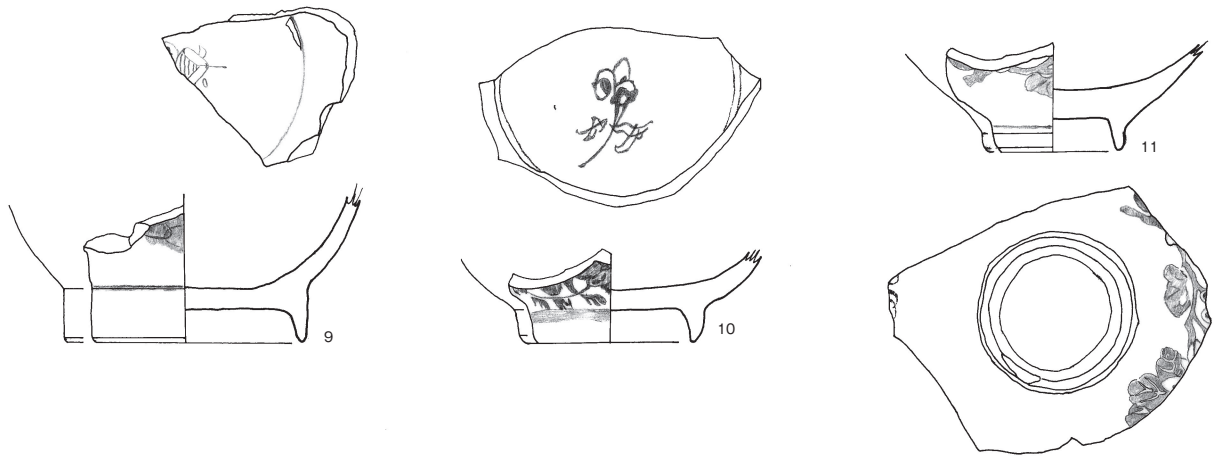


第8図 地頭館跡地点 出土遺物 磁器類（染付1）

イ 陶器類 [第14図～第17図、第3表]

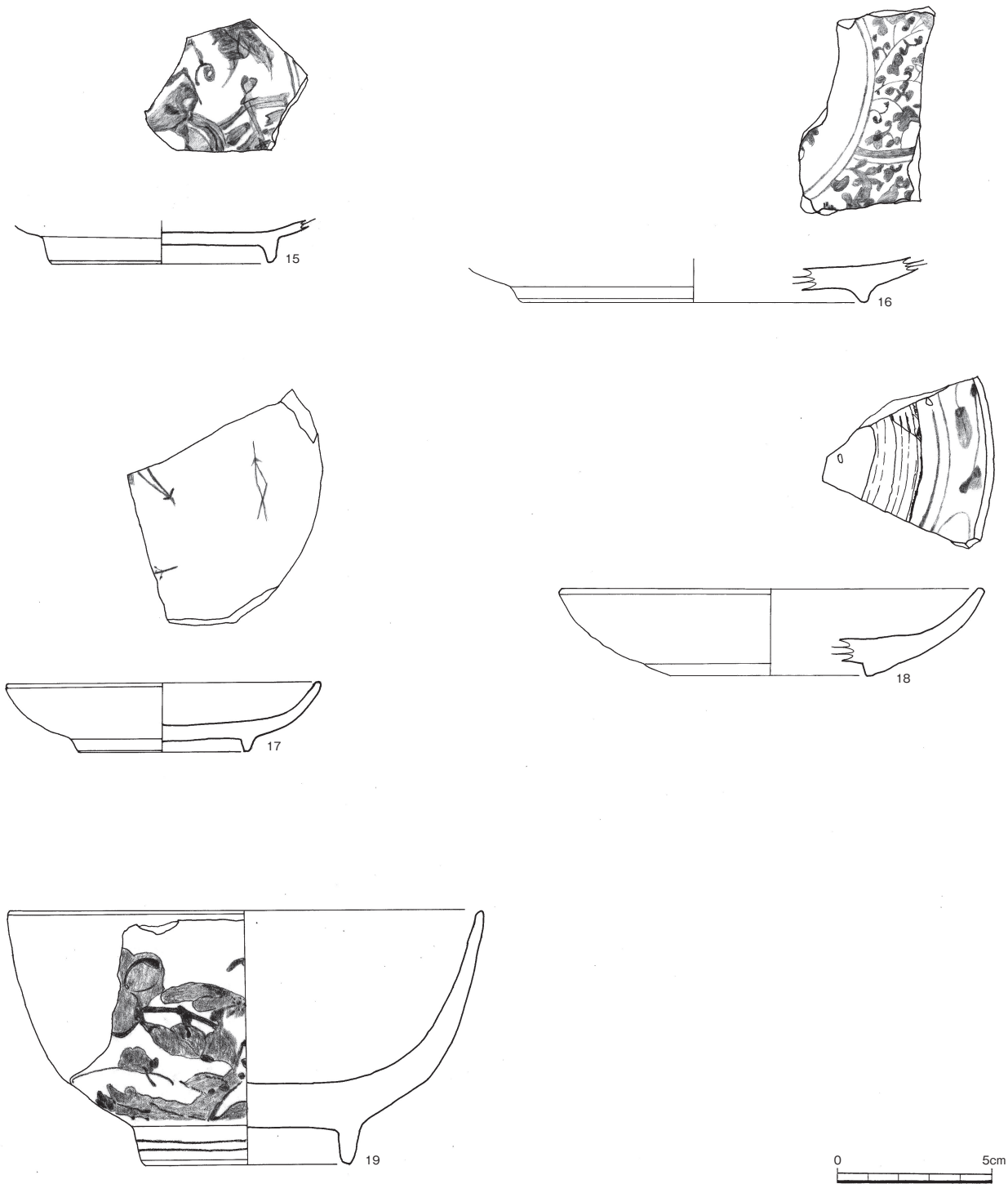
38～59は陶器類である。

38は肥前産の抹茶碗で、胎土はきめ細かく乳濁色である。見込みには重ね焼目跡が見られる。39は苗代川系の土瓶の蓋である。40は関西系のもつと見られる皿の底部である。41は高台が露胎する加治木・始良系の碗である。42は高台内面が曲がって削られる特徴の肥前産の碗である。43は肥前産の碗で、高台は竹節の形状を持つ。44は瓶類で胎土が白濁色できめ細かく関西系のもつと見られる。45は底部と内面は無釉の瓶類で、加治木・始良系のもつである。46・47は砂目跡が残る小皿で



加治木・始良系のものである。48は小片のため詳細は不明であるが、頸部～胴部が張り出す器形の壺・瓶類の一部と見られる。49は坪地業の埋土から出土した肥前産鉢類の口縁部下位のものともみられる。50は苗代川系のもので太目の楕目を持つ摺鉢である。51は瓦質器の火舎とみられる。52は加治木・始良系の瓶類で内面は無釉である。53は高台内の胎土に引っ掻き痕が見られる肥前産の大型の鉢である。54は坪地業の埋土から出土した瓦質器で、腰部が面取りされる薩摩産の特徴を持つ。口唇部にススが見られることから灯明皿と見られる。55は苗代川系の片口鉢でずん胴型のものである。口唇部以外は暗緑色の釉が施釉される。56は溝状遺構の埋土から出土した備前焼の大型甕・壺類の口縁部である。57は苗代川系の壺口縁部である。全面に鉄釉を施釉後、口唇部以外に褐色釉を施釉する。口唇部に土目跡が残る。58は苗代川系の片口鉢で、貝目の残

第9図 地頭館跡地点 出土遺物 磁器類（染付2）

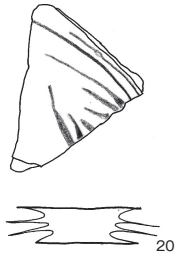


第10図 地頭館跡地点 出土遺物 磁器類（染付3）

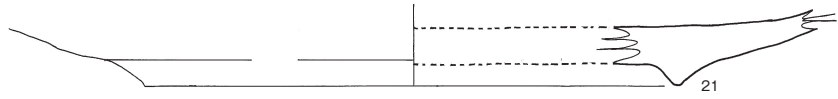
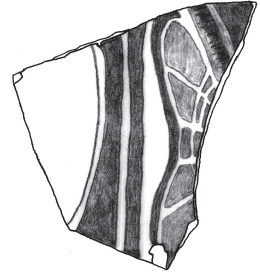
る口唇部を内側に折り返し、口縁部全体はやや外側に広がる器形を持つものである。59は白化粧土が見られる肥前産の大型の鉢である。

ウ 瓦類 [第18図、第4表]

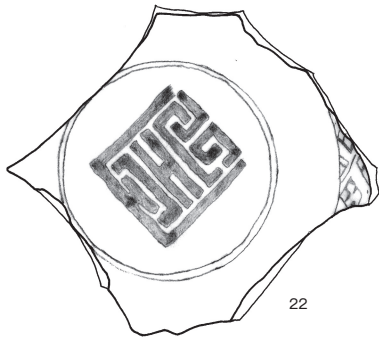
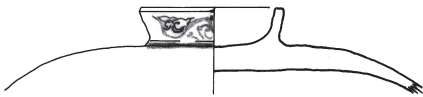
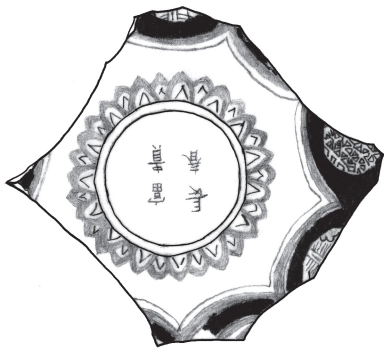
60～63は瓦類である。



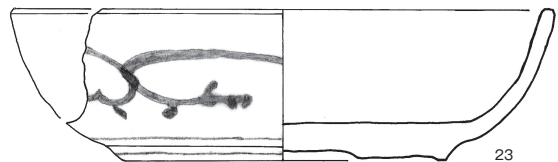
20



21



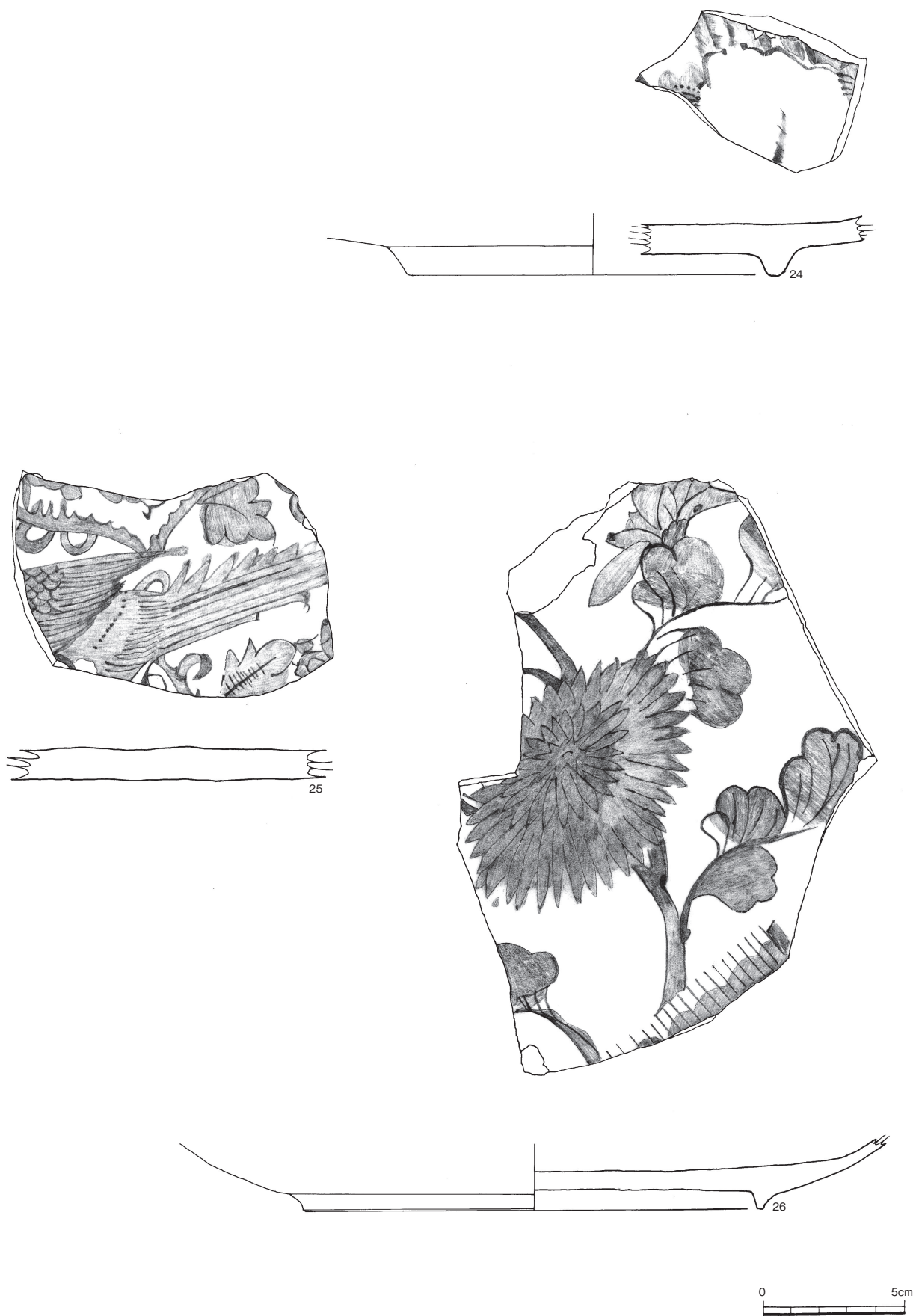
22



23

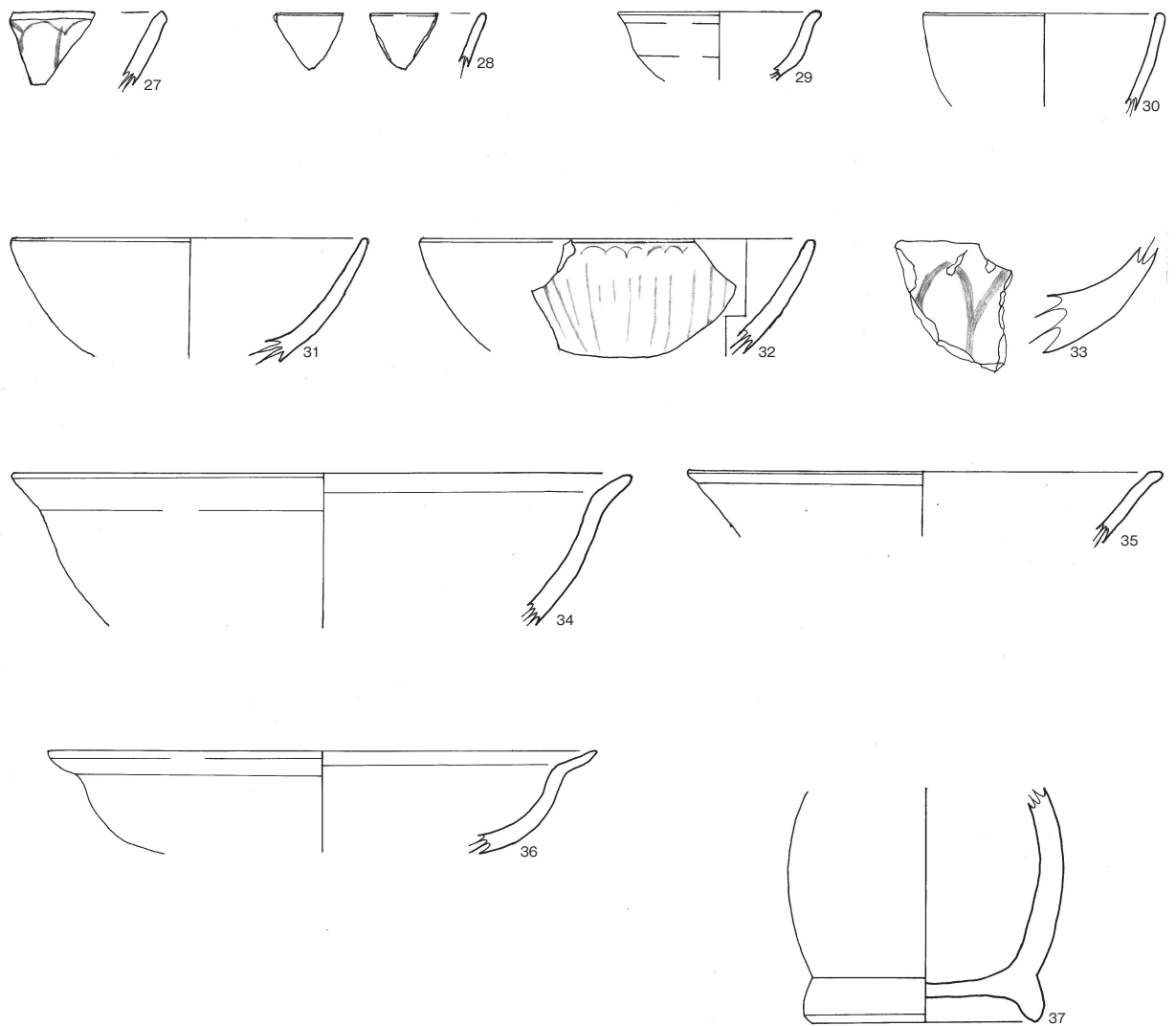


第11図 地頭館跡地点 出土遺物 磁器類 (染付4)

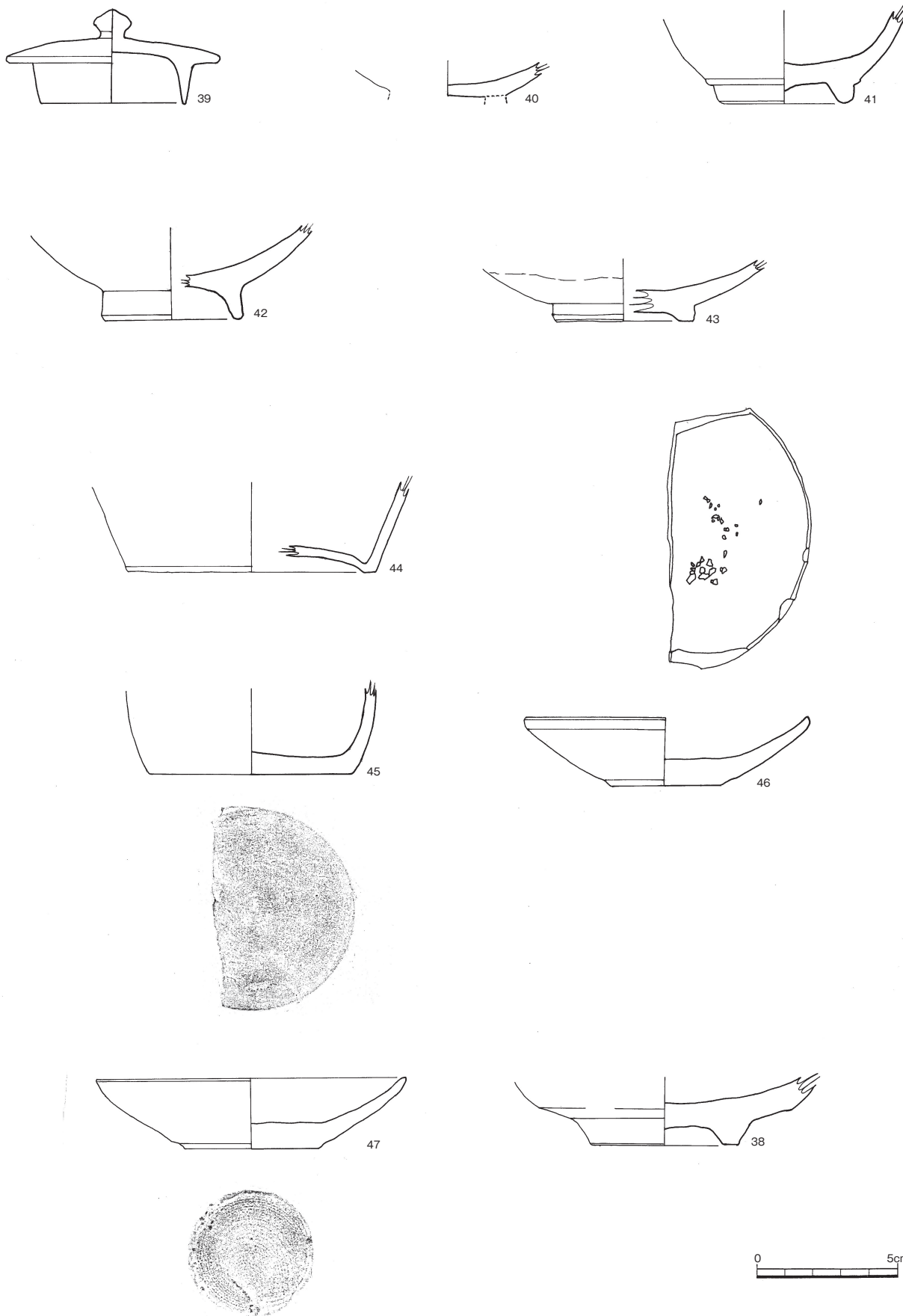


第12図 地頭館跡地点 出土遺物 磁器類 (染付5)



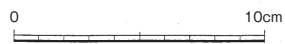
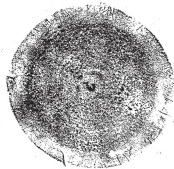
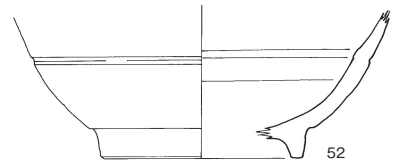
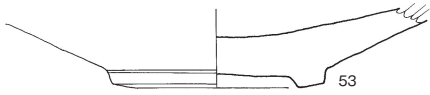
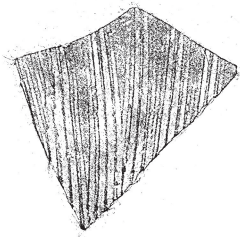
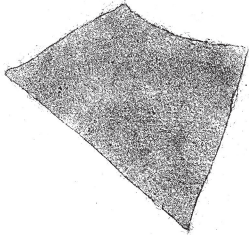
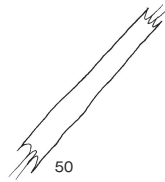
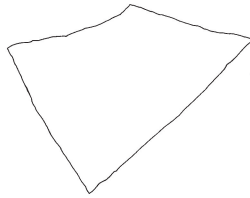
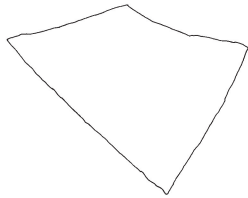
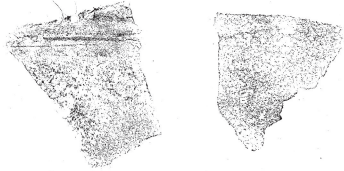
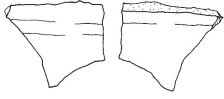
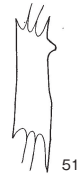
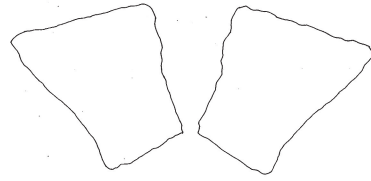


第13図 地頭館跡地点 出土遺物 磁器類（青磁、白磁、その他）

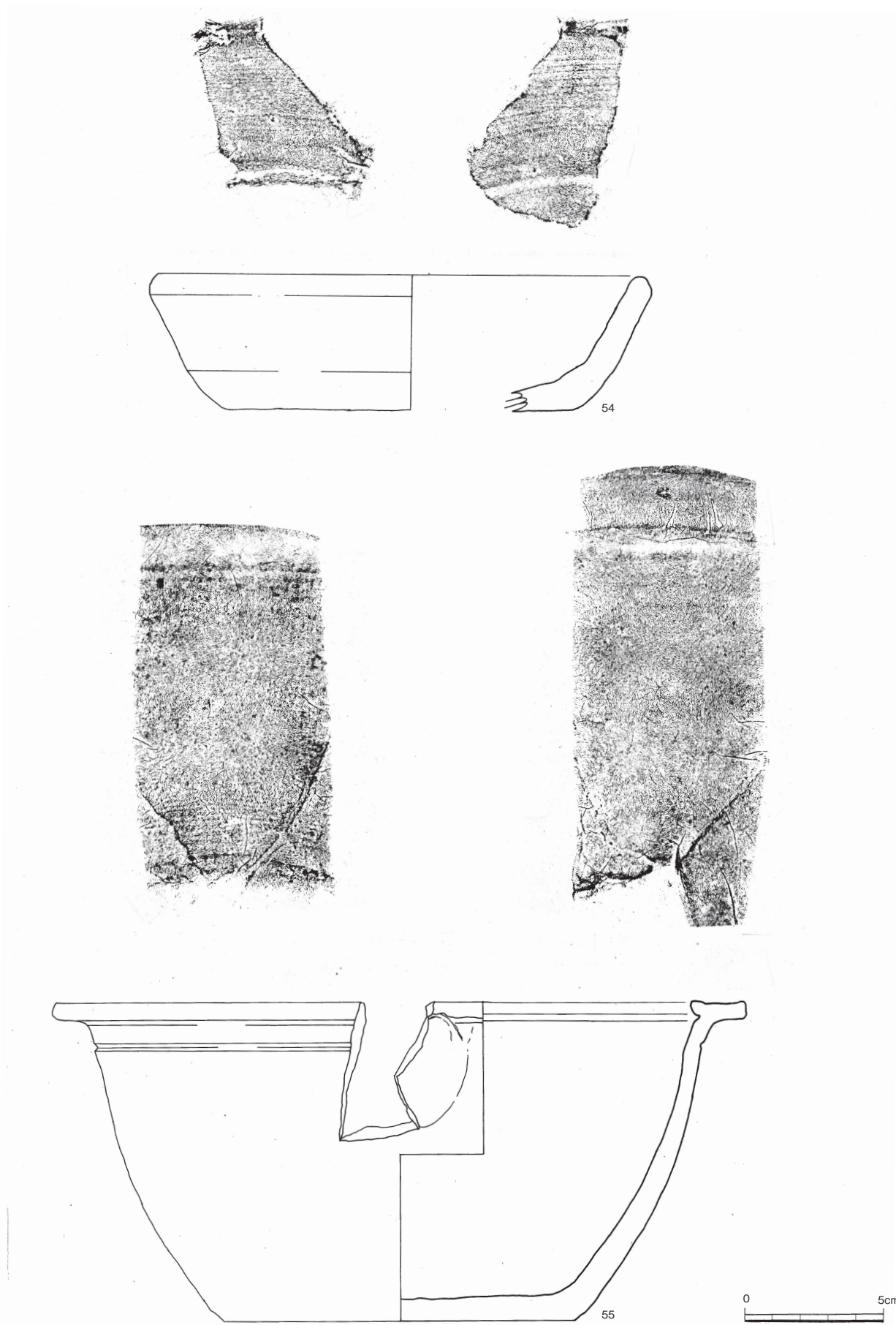


第14図 地頭館跡 出土遺物 陶器類 1

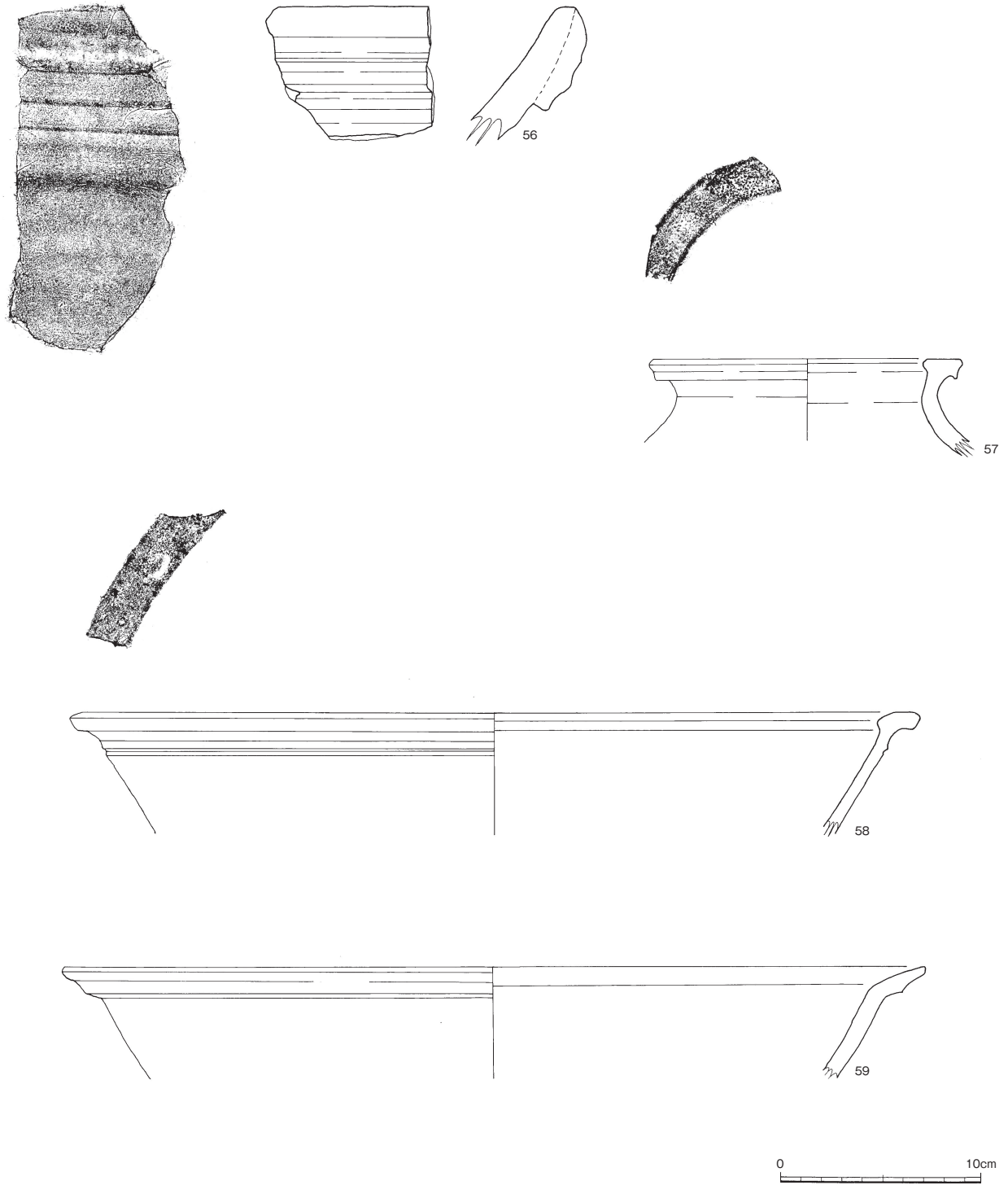




第15図 地頭館跡地点 出土遺物 陶器類2



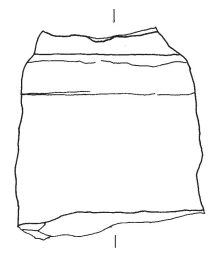
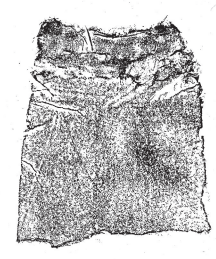
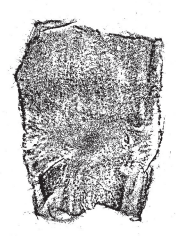
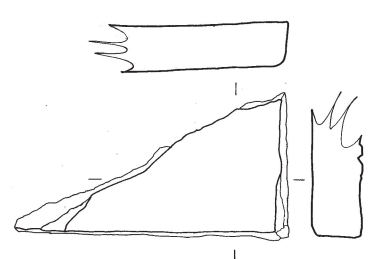
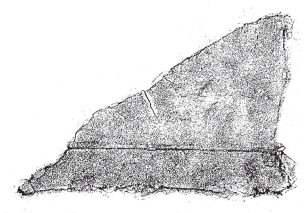
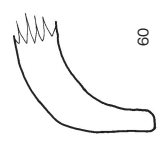
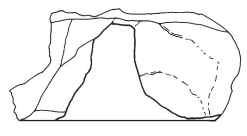
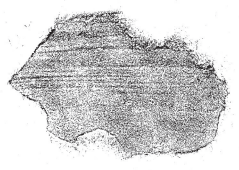
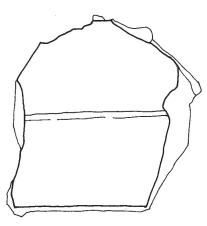
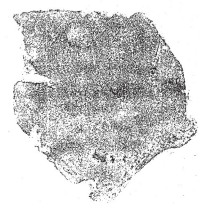
第16図 地頭館跡地点 出土遺物 陶器類 3



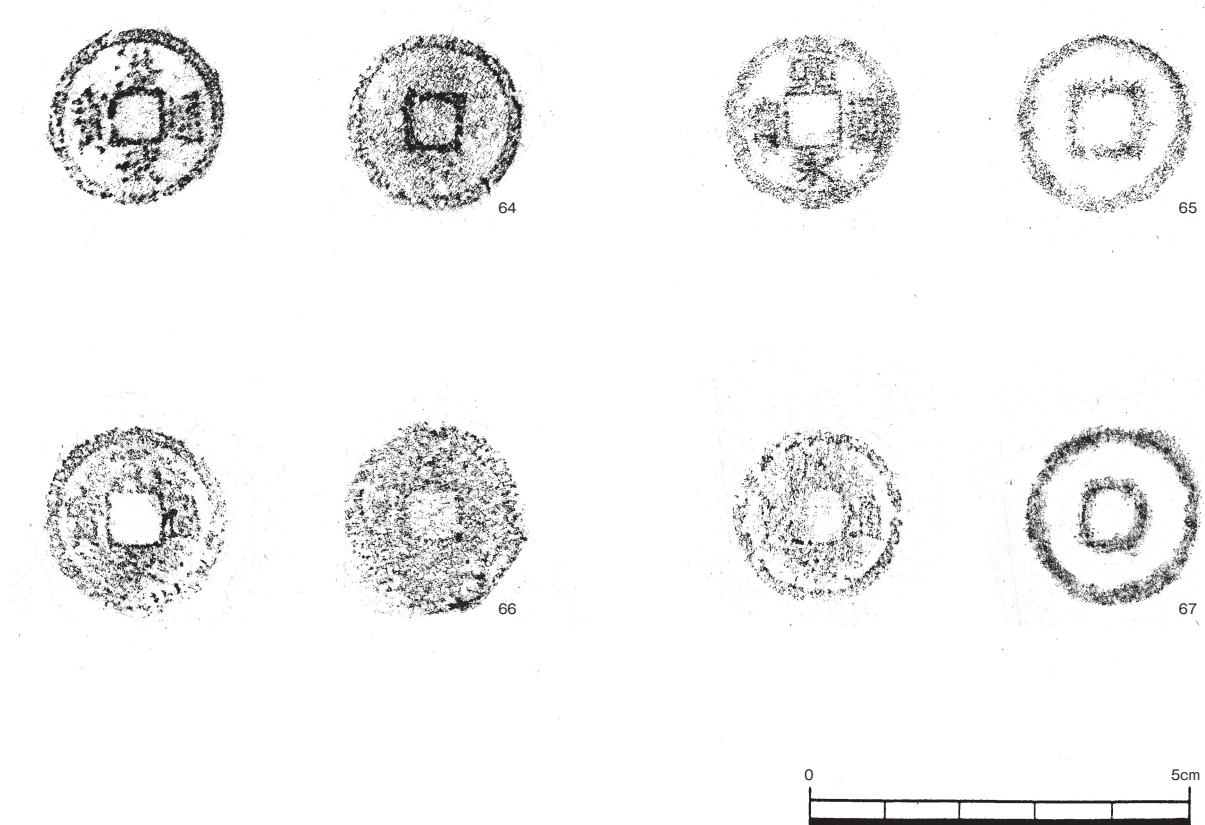
第17図 地頭館跡地点 出土遺物 陶器類 4

60 は器種が不明の瓦又は瓦質器である。素焼きで工具（刷毛目）痕が両面に見られる。61 は素焼きの棧瓦である。外面は磨かれている。62 は素焼きの丸瓦である。内面に布目痕が残る。63 は素焼きの平瓦である。裏面に溝が2条見られる。

エ 古銭類 [第19図、第5表]



第18図 地頭館跡地点 出土遺物 瓦類



第19図 地頭館跡地点 出土遺物 古銭

64～67は古銭である。

64は洪武通宝である。65～67は寛永通宝である。66・67は全面に渡り磨耗が激しく厚さが薄くなっている。

#### オ 石製品・石器類 [第20図・第22図、第6表]

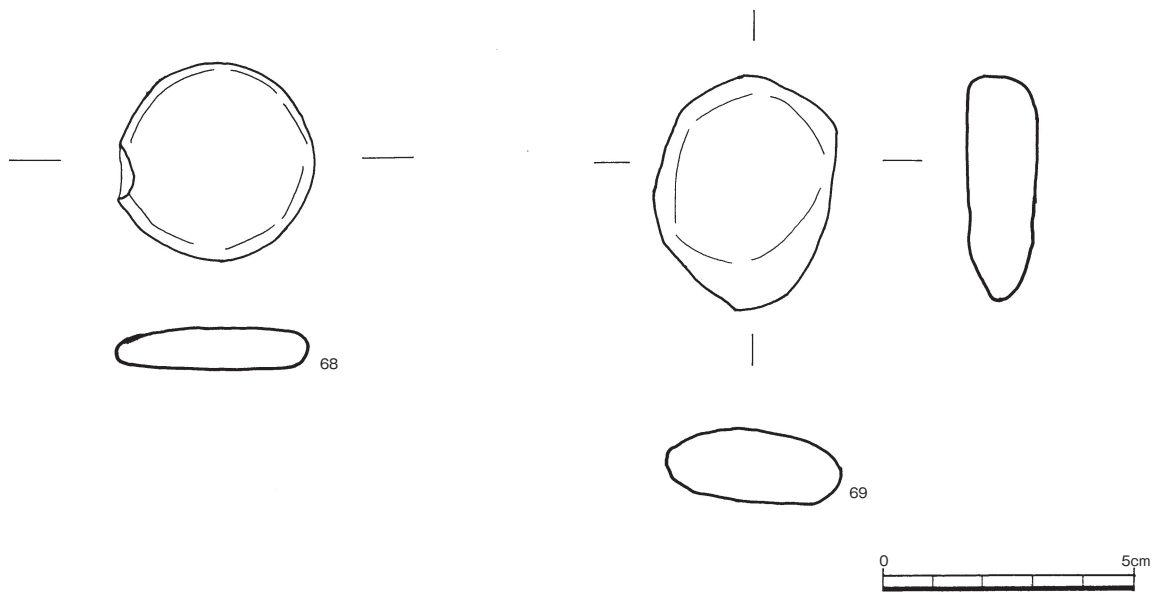
68・69、74・75は石製品・石器類である。

68は黒色の基石である。研磨は片面（表面）のみで頁岩製と見られる。69は緑泥片岩製で全面を研磨していることから愛玩石（ペットストーン）や装飾用の類のものと見られる。74・75は石器製作時に産出される剥片で74はチャート、75は佐賀県の腰岳産の黒曜石である。

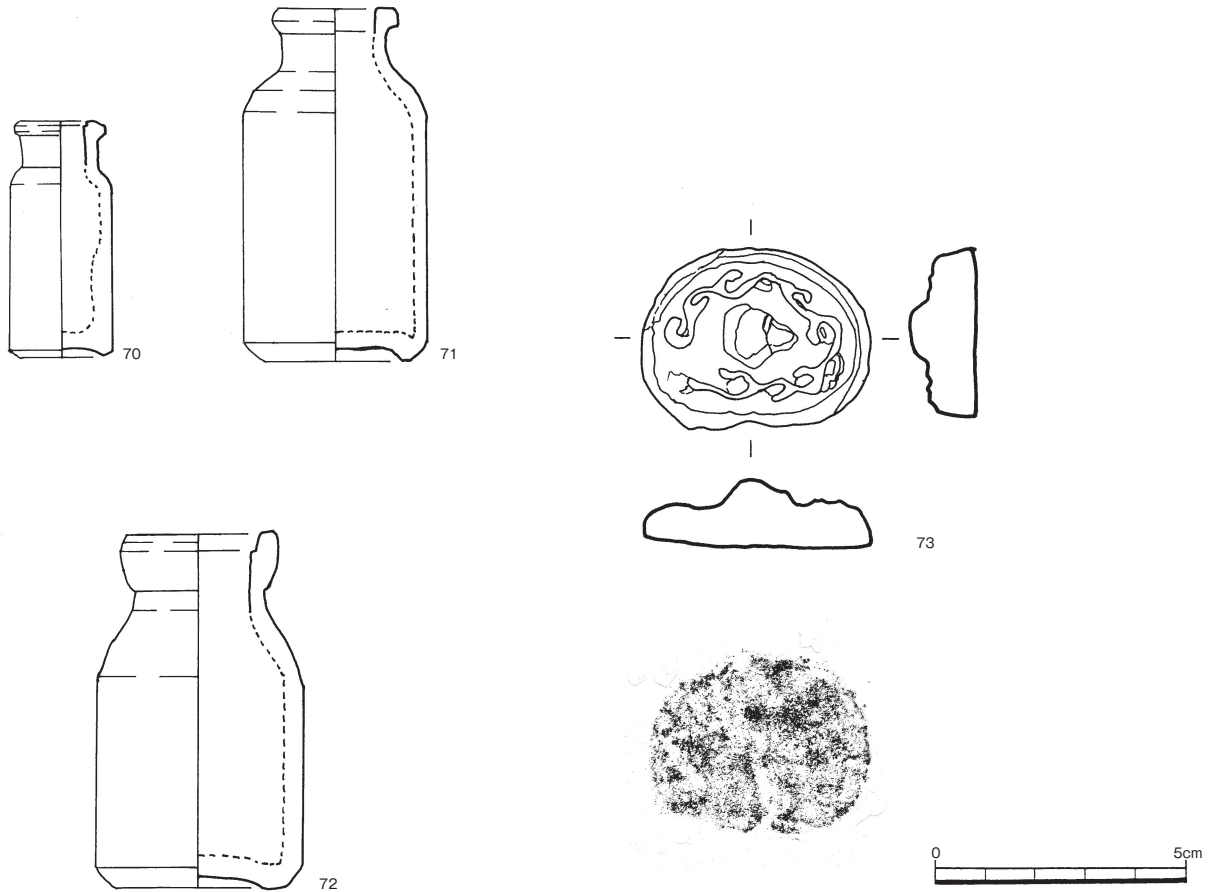
#### カ その他の遺物 [第21図、第3表]

70～72はガラス製品、73は土製品、76・77は土器である。70～72は小・中型のガラス製瓶である。70・72は透明で71は薄い水色である。いずれも底面外側にレリーフがあり、70には「K 12」、71には「洋傘」、72には「◇の内部にN」のデザイン図と、その外側に「A」、「5」、「S又は8」、の4種の図・文字が見られる。当地には以前に診療所や保育園があったことから、薬品等の容器と思われる。73は片面に唐草文洋風のレリーフが見られる土製品である。白濁色の胎土で彩色されておらず、用途等詳細は不明である。76は縄文時代晩期の粗製浅鉢である。外面にはススが付着し、内面はヘラ磨きされている。77は古墳時代の成川式土器で丸底の底部である。

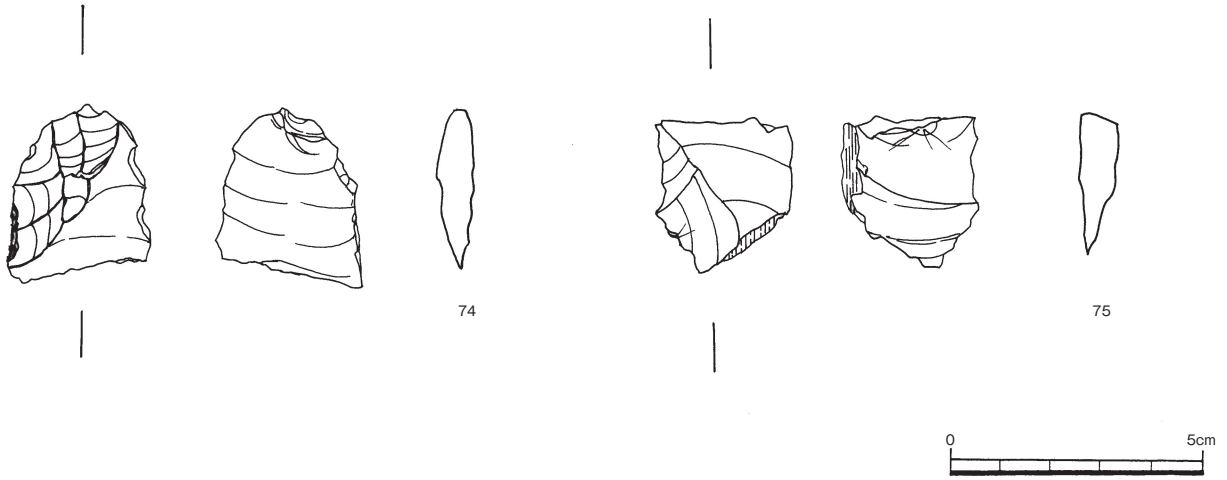




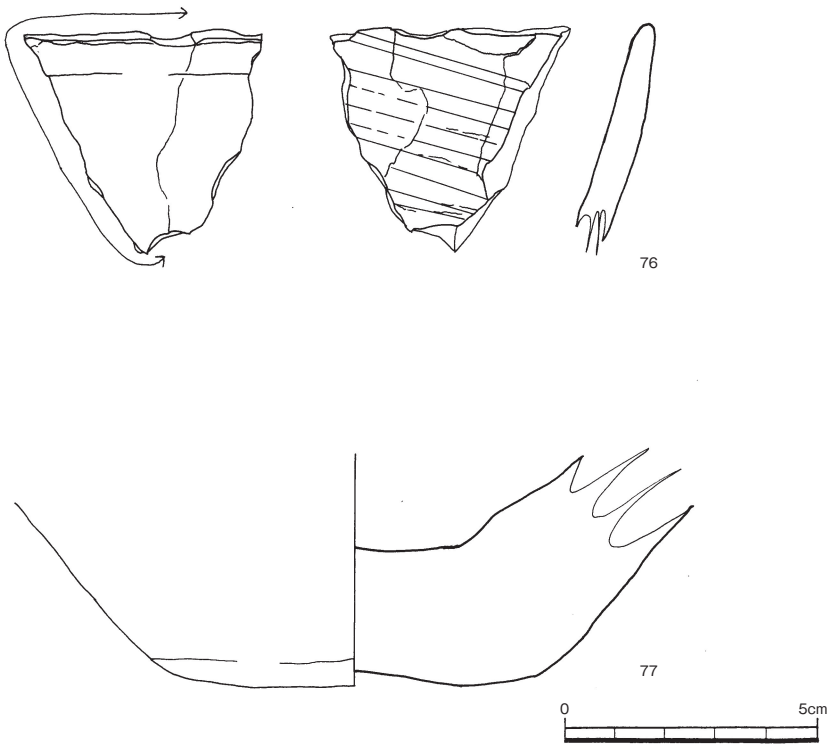
第20図 地頭館跡地点 出土遺物 石製品



第21図 地頭館跡地点 出土遺物 ガラス製品、その他



第22図 地頭館跡地点 出土遺物 その他遺物（石器）



第23図 地頭館跡地点 出土遺物 その他遺物（土器）

第3表 出水麓遺跡地頭館跡 土器類 観察表

挿図	レイアウト 番号	出土区	出土層	遺物番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴など
							口径	高さ	底径	
8	1	2 T	I a	一括	磁器・染付	薄手酒坏	-	(2.2)	-	見込梅花文?、端反形、19c 中
8	2	D 3	I a	一括	磁器・染付	皿	7.8	(2.7)	-	見込草文、中国磁器、16c 後～17c 前
8	3	D 3	I b	一括	磁器・染付	皿	7.9	(3.7)	-	見込草文、外面草文、清朝磁器、18c 末～19c 初
8	4	2 T	I a	一括	磁器・染付	碗	-	(1.7)	2.0	豊付無袖、見込(昆虫文崩し?)、外面(笹文?)、肥前
8	5	D 3	廃土	一括	磁器・染付	(丸)碗	-	(2.2)	1.9	豊付無袖、肥前、19c
8	6	三原石垣	表採	一括	磁器・染付	碗	-	(4.2)	3.0	広東形、見込砂目跡3点、豊付無袖、肥前、18c 末～19c 初
8	7	D 3	I 層(落込み)	一括	磁器・染付	碗	6.8	5.2	2.3	見込・外面丸文、豊付無袖
8	8	2 T	表採	一括	磁器・染付	碗	-	(4.1)	2.5	豊付無袖、見込寿崩し、薩摩磁器、19c 中～幕末
9	9	2 T	表採	一括	磁器・染付	碗	-	(3.9)	3.2	広東形、見込昆虫文、豊付無袖、薩摩磁器、18c～19c 初
9	10	1 T	I 層掘り込み	一括	磁器・染付	碗	-	(2.4)	2.2	豊付無袖、見込昆虫文(崩し?)、外面笹文?、肥前18c
9	11	1 T	II a	一括	磁器・染付	碗	-	(2.8)	1.8	豊付無袖、染付風文様、近現代
9	12	2 T	I a	一括	磁器・染付	皿	-	(2.5)	3.6	蛇の自高台、見込豆弁花文と草花文、肥前、18c～19c
9	13	D 3	廃土	一括	磁器・染付	碗	-	(4.2)	2.1	豊付無袖、外面二重網目文、肥前
9	14	7 T	表採	一括	磁器・染付	鉢	-	(4.8)	3.2	見込目跡5点、山水文、外面笹文?、波佐見、19c
10	15	D 3	I b	一括	磁器・染付	皿	-	(1.3)	3.7	豊付無袖、見込・外面草花文?中国磁器、16c 後～17c 前
10	16	D 3	I a	一括	磁器・染付	皿	-	(1.4)	5.6	豊付無袖、中型、見込草花文、肥前
10	17	2 T	I a	一括	磁器・染付	皿	10.3	2.3	5.5	小皿、豊付無袖、見込松葉文、薩摩磁器、19c
10	18	2 T	表採	一括	磁器・染付	皿	7.0	2.9	4.8	見込草花文、蛇の目刻ぎ、基筒底に砂目残る、波佐見、18c 後
10	19	三原石垣	表採	一括	磁器・染付	鉢	7.6	8.3	3.3	見込五弁花文、外面草文、高台福文、肥前、18c 後
11	20	2 T	表採	一括	磁器・染付	皿	-	(1.0)	-	大皿、草文?、肥前
11	21	1 2 T	I a	一括	磁器・染付	皿	-	(2.0)	7.1	大皿、豊付無袖、肥前、18c 中
11	22	1 T	表採	一括	磁器・染付	蓋	-	(2.0)	3.7	見込「富貴長春」、肥前色絵、鉢物の蓋(大型)、18c 後
11	23	2 T	I a	一括	磁器・染付	皿	7.0	4.0	4.2	蛇目凹型高台、肥前、19c
12	24	E 3	I a	一括	磁器・染付	皿	-	(2.1)	6.3	大皿、豊付無袖、肥前、18c～19c
12	25	三原石垣	表採	一括	磁器・染付	皿	-	(1.1)	-	大皿、漳州窯16c 末～17c 前
12	26	三原石垣	表採	一括	磁器・染付	盤	-	(2.5)	8.2	大皿、豊付無袖、花文、高台裏に目跡3点、肥前、19c
13	27	D 3	I 層(落込み)	一括	青磁	碗	-	(2.0)	-	蓮弁文、15c 中
13	28	D 3	SB2 埋土	一括	白磁	碗	-	(1.6)	-	薄手
13	29	1 3 T	表採	一括	白磁	碗	2.8	(1.9)	-	小型、口縁端反り、近代
13	30	3 T	土坑 埋土	一括	磁器?	碗	3.4	(2.6)	-	白薩摩、胎土乳濁色、小型、近世
13	31	1 T	I a	一括	磁器	碗	3.9	(3.5)	-	小型、肥前
13	32	D 3	カクラン	一括	青磁	碗	5.5	(3.2)	-	貫入大、蓮弁文、16c 前半
13	33	6 T	I a	一括	青磁	鉢	-	(3.6)	-	蓮弁文、14c 後～15c 初
13	34	1 T	II b	1	青磁	鉢	8.6	(4.2)	-	端反り口縁、貫入なし
13	35	D 3	サブトレンチ	一括	磁器	皿	6.6	(1.3)	-	小皿、口唇部外反、端反り
13	36	2 T	表採	一括	磁器?	皿	7.6	(2.8)	-	胎磁灰色、中心部茶色、龍門寺、18c 後
13	37	DE 3	廃土	一括	青磁	瓶	-	3.0	(6.4)	花瓶、豊付無袖、肥前
14	38	2 T	I a	一括	陶器	碗	-	(2.4)	2.6	抹茶碗、肥前、16c 末～17c 初
14	39	1 T	II a	一括	陶器	蓋	-	3.3	2.6	土瓶の蓋、外面のみ施釉(灰釉)、苗代川系、18c 後
14	40	E 3	カクラン	一括	陶器	皿	-	(1.3)	2.1	高台無袖、貫入微細に入る、関西系?
14	41	2 T	I a	一括	陶器	碗	-	(3.3)	2.2	加治木・始良系(赤胎土に褐釉)、18c 後～19c、高台露胎
14	42	DE 3	廃土	一括	陶器	碗	-	(3.3)	2.4	肥前、17c
14	43	2 T	表土	一括	陶器	碗	-	(2.2)	2.4	見込蛇目刻ぎ跡2箇所、肥前、近世(17c 前)
14	44	D 3	廃土	一括	陶器	瓶	-	(3.2)	3.2	灰釉、豊付全面無袖、上げ底、関西系?
14	45	2 T	I a	一括	陶器	瓶	-	(3.0)	3.6	胎土鉄釉色、加治木・始良系、19c 以降
14	46	2 T	II a	一括	陶器	皿	5.2	2.4	2.0	小皿、加治木・始良系、砂目跡、18c～19c
14	47	2 T	I a	一括	陶器	皿	5.5	2.5	2.4	小皿、加治木・始良系、砂目跡、18c～19c
15	48	3 T	表土	一括	陶器	不明	-	(2.9)	-	頸部～胴部張り出す器形、両面褐釉
15	49	D 3	SB 3 埋土	一括	陶器	鉢	-	(3.2)	-	摺鉢、胎土黒灰色、両面鉄釉、肥前、17c
15	50	2 T	表土	一括	陶器	鉢	-	(6.6)	-	摺鉢、苗代川、18c 前
15	51	3 T	土坑埋土	一括	陶器	鉢	-	(6.2)	-	瓦質器、火舎、外面黒色、中世
15	52	D 3	廃土	一括	陶器	瓶	-	(5.8)	4.0	加治木・始良系、19c 以降
15	53	三原石垣	表採	一括	陶器	鉢	-	(3.1)	4.3	大鉢、肥前、17c 前
16	54	D 3	SB5埋土	一括	陶器	皿	8.2	4.9	5.9	薩摩産、瓦質器、灯明皿、近世初頭
16	55	2 T	II b	一括	陶器	鉢	12.5	11.5	6.3	片口鉢、苗代川系、18c 後～19c 初
17	56	D 3	溝状遺構埋土	一括	陶器	甕・壺類	-	(6.5)	-	大型の甕・壺類口縁部、備前、中世陶器
17	57	2 T	I a	一括	陶器	壺	7.8	(4.7)	-	苗代川系、18c～19c
17	58	2 T	I b	一括	陶器	鉢	20.8	(5.9)	-	片口鉢、苗代川系、18c 前
17	59	2 T	I a	一括	陶器	鉢	21.1	(5.4)	-	大鉢、肥前
21	70	E 3	カクラン	一括	ガラス製品	瓶	0.9	4.7	1.0	透明ガラス小瓶
21	71	E 3	カクラン	一括	ガラス製品	瓶	1.3	7.1	1.8	うす水色のガラス小瓶
21	72	E 3	カクラン	一括	ガラス製品	瓶	1.4	7.0	1.7	透明ガラス小瓶
21	73	DE 3	表採	一括	土製品	不明	-	1.4	-	レリーフのある土製品
23	76	E 3	I a	一括	土器	鉢	-	(4.3)	-	縄文晩期粗製浅鉢、ヘラ磨き
23	77	D 3	サブトレンチ	一括	土器	壺	-	(4.6)	3.7	古墳時代成川式土器、底部丸底



第4表 出水麓遺跡地頭館跡 瓦類 観察表

挿図	レイアウト 番号	出土区	出土層	遺物番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴など
							幅	高さ	厚み	
18	60	6 T	表土	一括	瓦	不明	(4.5)	(5.6)	(1.7)	詳細不明、工具（ハケ）痕両面
18	61	DE 3	廃土	一括	瓦	棧瓦	(7.8)	(3.7)	(1.7)	外面ミガキ、明茶色（肌色）の色調
18	62	DE 3	廃土	一括	瓦	丸瓦	(7.4)	(3.3)	(2.2)	内面布目痕
18	63	D 3	カクラン	一括	瓦	平瓦	(6.0)	(2.0)	(2.0)	ウラ面スベリ止め？、溝2条

第5表 出水麓遺跡地頭館跡 古銭 観察表

挿図	レイアウト 番号	出土区	出土層	遺物番号	種別	名称	法量 (cm)		特徴など
							幅	厚さ	
19	64	D 3	I b	一括	古銭	洪武通宝	(2.3)	(0.1)	
19	65	D 3	I a	一括	古銭	寛永通宝	(2.3)	(0.1)	
19	66	D 3	I a	一括	古銭	寛永通宝	(2.4)	(0.1)	全面磨耗激しい
19	67	2 T	I a	一括	古銭	寛永通宝	(2.4)	(0.1)	全面磨耗激しい

第6表 出水麓遺跡地頭館跡 石器類 観察表

挿図	レイアウト 番号	出土区	出土層	遺物番号	器種	材質	法量				特徴
							長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	
20	68	E 3	I a	一括	碁石	頁岩？	2.0	1.9	0.4	2.3	表（上）面のみ研磨
20	69	E 3	カクラン	一括	愛玩石？	緑泥片岩？	2.4	1.8	0.7	5.5	全面研磨
22	74	E 3	カクラン	一括	剥片	チャート	1.7	1.4	0.4	0.8	打痕あり
22	75	E 3	カクラン	一括	剥片	黒曜石	1.5	1.3	0.4	0.6	腰岳産、打痕あり

## 第2節 御飯屋跡の調査

### (1) 調査目的と方法 [第38図]

平成25年度に実施した発掘調査は、旧校舎解体・撤去後の新校舎建設範囲内において、旧地層残存区域の確認及び同区域の埋蔵文化財包含層の有無確認を目的として行った。

旧地層残存区域は、旧校舎の建設により掘削された基礎部以外はほぼ残存していた。この残存部に対してトレンチを計7カ所任意に設定し、作業員による確認発掘調査を実施した。

確認発掘調査では7つのトレンチからは埋蔵文化財包含層は確認されなかったが、旧地層残存部確認作業（表土等除去作業）中に新校舎建設範囲外の隣接部にピットや土坑と思われる遺構を検出した。

遺構検出地点は、厳密には工事範囲外の地点だが隣接地点であるため、現地保存は必ずしも保証されるものではないと思われた。一方で、検出されたこれら遺構の記録保存のための各作業は当初調査期間内に実施可能であることなどを考慮した結果、確認発掘調査と並行して遺構の記録保存のための発掘調査を実施することとした。

旧校舎解体・撤去後の表土除去作業及び埋戻し作業は重機により行い、旧地層残存部確認作業、確認発掘調査及び記録保存発掘調査の掘削は作業員により実施した。

### (2) 概要 [第24図・第25図]

#### ア 確認発掘調査

全トレンチから、遺構の検出、遺物の出土は確認されなかった。

ただし、礫集積遺構が計3基検出されたが、いずれも礫・埋土中に近現代の瓦片やコンクリート片が混在していたため、発掘調査の対象ではないと判断し、そのまま埋め戻した。

トレンチの表出面は、すべて黄褐色砂質土層であり、この地層は本遺跡のこれまでの発掘調査において地盤層に比定しているAT火山灰層(前節の地頭館地点における第Ⅲ層に該当)である。

このことから、当地点においては第Ⅲ層より上位の層は既に消失していることが判明した。

#### イ 記録保存発掘調査

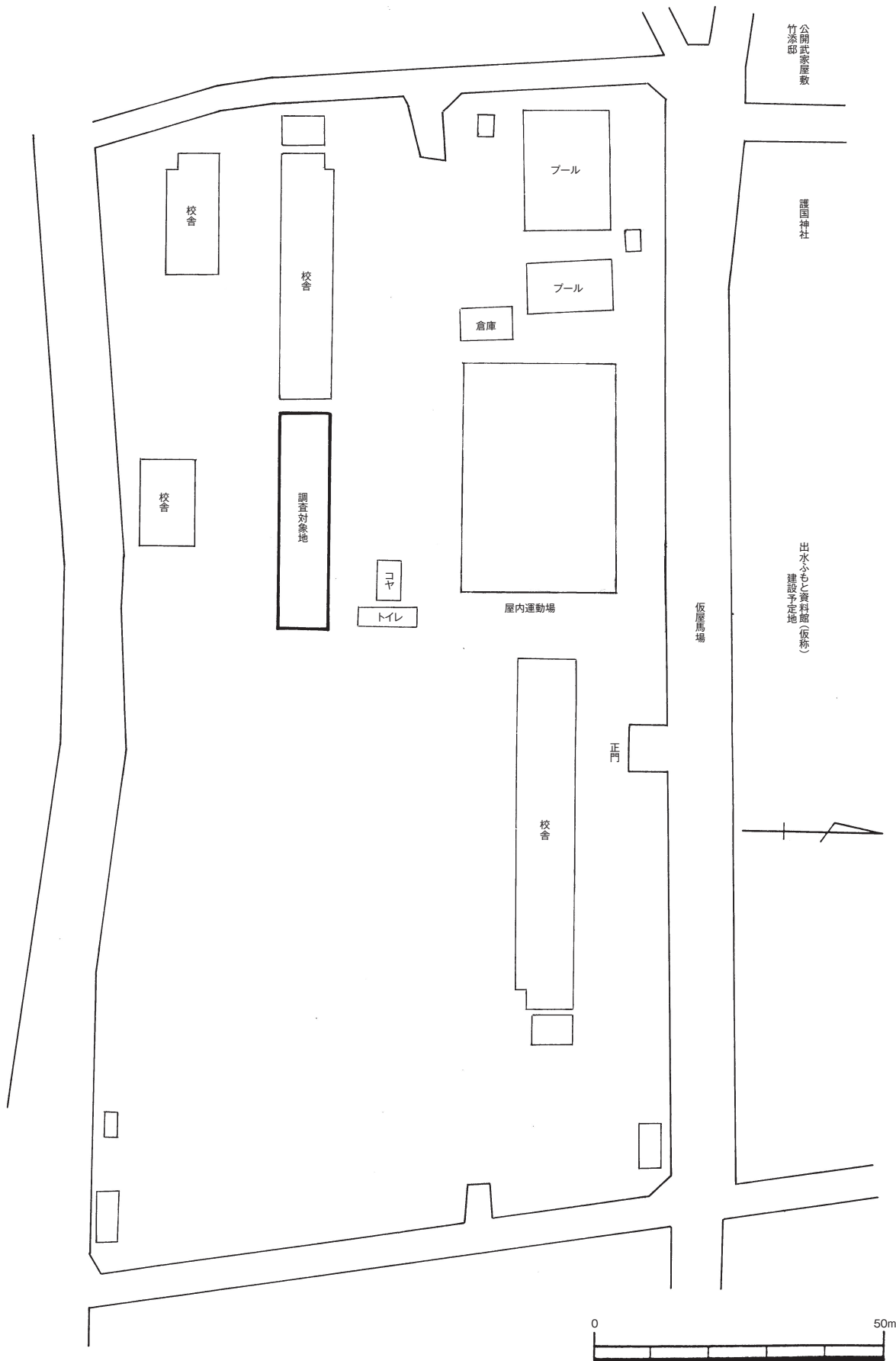
記録保存発掘調査は、新校舎建設範囲の南側の外部隣接地点において検出されたピット3基と土坑1基及び同範囲の南側縁边上の地点において検出されたピット1基を対象として実施した。

各遺構とも段掘り、半掘又は4分の1掘削により遺構であることを確認した後に写真撮影や各段階での実測作業を実施した。

### (3) 遺構

#### ア 土坑(SK1) [第26図、第7表]

SK1は、検出時の長径は70センチメートル、短径は30センチメートル、埋土を除去した完掘時の深さは30センチメートルである。P2とP3を切った状態で検出された。埋土から栗石6点、や青磁片が1点と土師器片1点がそれぞれ出土した。本遺構は北側及び掘込み面を消失しているため全体の様相がつかめず、用途や時期等の詳細は不明である。



第24図 御仮屋跡地点 調査状況

#### イ ピット (P1~P3) [第26図、第7表]

P1は、検出時の長径は34センチメートル、短径は32センチメートル、埋土を除去した完掘時の深さは21センチメートルである。断面は台形で底面は一部平坦面を有する。土師器と古墳時代土器の小片が1点ずつ埋土中から出土した。

P2は、検出時の長径は16センチメートル、短径は12センチメートル、埋土を除去した完掘時の深さは30センチメートルである。検出面及び底面の形状は楕円形でほぼ垂直に掘り込まれており底面は平坦である。埋土中からの遺物の出土は無い。

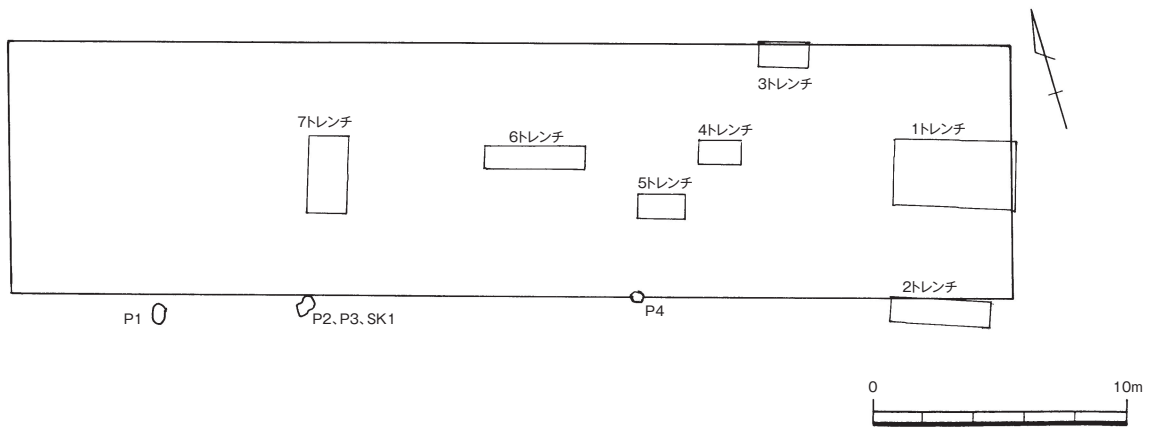
P3は、検出時の長径は45センチメートル、短径は26センチメートル、埋土を除去した完掘時の深さは30センチメートルである。検出面の形状から元は円形であったと思われるが、SK1に底部まで切られていること、及び北側は消失しているため詳細は不明である。やや斜位に掘り込まれている。埋土中からの遺物の出土は無い。

P4は、検出時の長径は18センチメートル、短径は17センチメートル、埋土を除去した完掘時の深さは18センチメートルである。検出面の形状は隅丸方形で底面は小さい楕円形である。掘り込みはほぼ垂直であるが、底面は斜面で隅の一部が尖るように掘り込まれる。埋土中からの遺物の出土は無い。

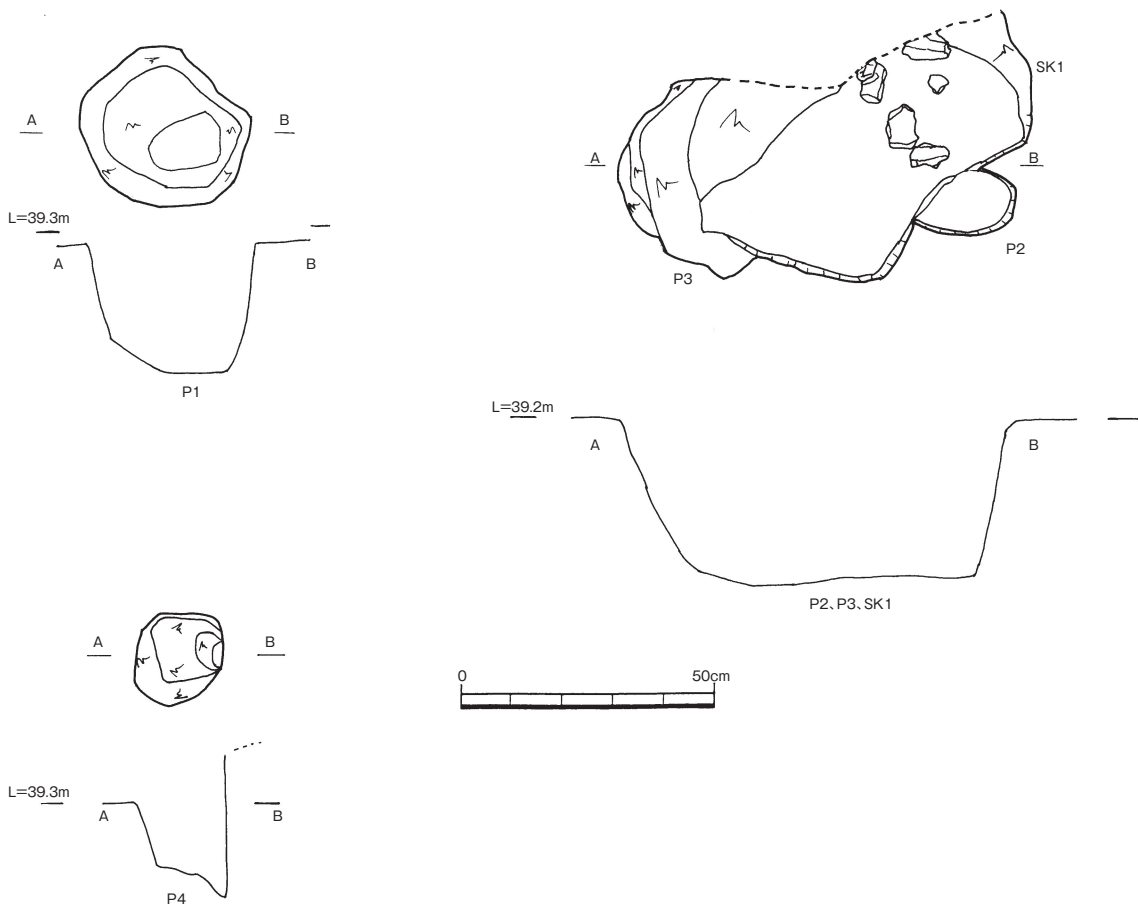
#### (4) 遺物 [第27図、第8表]

本地点においては、遺構の埋土から出土した遺物以外は、全て表土中から採集されたものである。

1はピット遺構の埋土から出土した土師器の小皿である。底部は糸切底である。2は肥前産の磁器で、八角鉢と呼ばれるものである。3は薩摩産の磁器で染付の皿である。畳付は無釉でやや尖る断面形状である。見込みには楼閣山水文が描かれる。4は豎野系の陶器碗である。白薩摩の素地に黒褐釉が施釉される。底面中央部の器壁は薄く作られている。



第25図 調査状況図



第26図 SK1、P1-P4

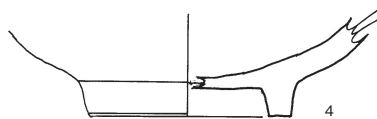
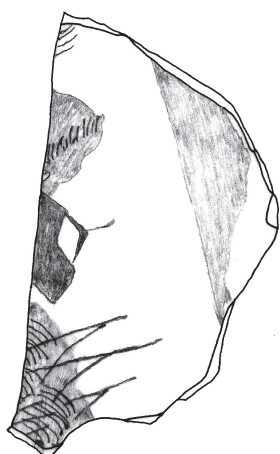
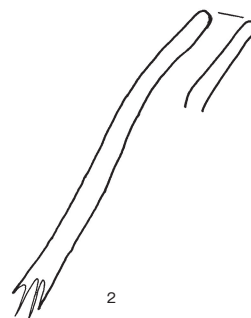
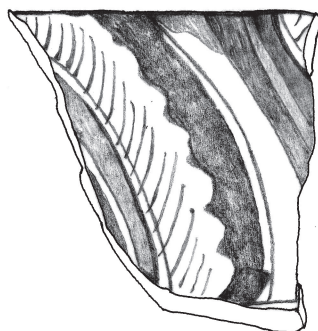
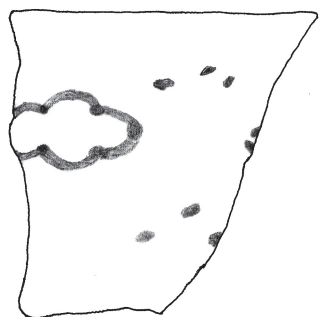
第7表 出水麓遺跡御飯屋跡 遺構計測表

挿図	調査区	遺構	計測値 (単位: cm)			形状			遺物、備考
			長径	短径	深さ	検出面	底面	断面	
26	御飯屋跡	SK1	(70)	(30)	30	不定形	不定形	台形	P2、P3を切る、栗石6、青磁1、土師器1
26	御飯屋跡	P1	34	32	21	隅丸方形	隅丸方形	台形	土師器小皿1、古墳時代土器小片1
26	御飯屋跡	P2	(16)	(12)	30	楕円形	楕円形	台形	SK1に切られる
26	御飯屋跡	P3	(45)	(26)	30	円形?	不明	台形	SK1に切られる
26	御飯屋跡	P4	18	17	18	隅丸方形	楕円形	台形	尖底面、南方に斜く

第8表 出水麓遺跡御飯屋跡 土器類 観察表

挿図	レイアウト 番号	出土区	出土層	遺物番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴
							口径	高さ	底径	
27	1	P 1	埋土	一括	土師器	皿	3.9	1.8	2.8	小皿、糸切底
27	2	御飯屋跡	表採	一括	磁器	鉢	-	(6.0)	-	八角鉢、肥前、19c
27	3	御飯屋跡	表採	一括	磁器	皿	-	(1.4)	(2.5)	見込楼閣山水文、薩摩磁器染付、19c 中
27	4	御飯屋跡	表採	一括	陶器	碗	-	(2.0)	2.1	堅野系





第27図 御仮屋跡地点 出土遺物

## 第4章 まとめ

### 1 地頭館跡地点

#### (1) 建物1

坪地業を基礎に持つ建物1については、SB4とSB9以外の坪地業をもって、少なくとも一軒の建物があったと考えられる。桁行のSB2とSB10の間及び梁間のSB5とSB13の間の坪地業が、後世に消失した可能性も含めて検出されなかった点に疑問は残るが、この地点に坪地業は必要なかった建物の造りであることも考えられる。

各坪地業の心中心距離は約2.2～2.7メートルでほぼ統一した規格で設置されていることが看取できる。同時期の遺跡には、藩境に設置された笹原茶屋（笹原遺跡又は茶屋ノ元B遺跡）があり、平成16年度の発掘調査では、地頭館跡で検出されたような坪地業と同様の規格の坪地業が16基検出され、それぞれの心中心距離はやはり同じく約2.2～2.3メートルであった。検出された坪地業で構築される笹原茶屋跡の建物は、少なくとも4間×4間のものであった。

建物1が建築された時期としては、SB3とSB5の埋土から出土した遺物49と54の年代は近世初頭又は17世紀を下らないことから、坪地業及び建物1は、出水麓の造成期に比較的近い時期で、遅くとも18世紀までには造られたと考えられる。

#### (2) 溝状遺構

今回検出された溝状遺構については前章でも述べたが、発掘調査期間終了間際での検出のため、必要最低限の記録しかとることができなかった。検出された溝状遺構の端部は、明瞭に形造られてはいないが、調査区内から調査区外へ続く境界部の土層断面及び底面の形状からは、地盤層を大きく掘り込んで遺構を造られたことが看取される。溝状遺構は調査区外の東側へ続いているものと思われる。

今回の調査では、その性格や目的等を明らかにするまでには至らなかったが、中世の遺物が埋土にあったことから、藩政期に入り建物等を設置する以前の出水麓造成工事に関連するような遺構の可能性も考えられる。

#### (3) 遺物

遺物は、発掘で出土した遺物以外に表面採集のものも多量にあった。当地及び当地付近には藩政期には噺役所などがあったとされ、それ以降も診療所や青年会館、保育園、職員住宅などが建設、解体・撤去されてきた。これら後世の所為により各施設各時代の遺物が混在することになったと思われる。ここでは、江戸時代の遺物を中心に考察することとする。

今回の発掘調査に加え、これまでの発掘調査においても地元薩摩の陶磁器類以外に、肥前産の陶磁器類がかなり目立って出土している。磁器については、初めの頃は肥前系が多いが、19世紀から幕末頃にかけては、藩が肥前系磁器の流入を規制し始めるため薩摩磁器が目立つようになる。また、輸入磁器については、江戸時代初期は中国磁器（中国各所の窯）が主であるが、19世紀に入ると清朝磁器が主となっていく。

これら遺物の年代については、16世紀後期（1,500年代後期）の中世後半頃から、19世紀中期（1,800年代中期）幕末期まで幅広くみられる。

出土遺物の器種組成等から見た特徴を以下に列挙する。

- ・肥前系の大皿、大物、組物（くみもの）が目立つ。これらは接待などを含めた、宴席用のものである。
- ・煎茶や抹茶道具（碗）が見られる。これらは、茶会等に使われたもので、ある程度たしなみを持った人物が居たことがわかる。
- ・陶器について、甕壺類は苗代川系（現在の日置市東市来町美山付近）のものが中心。碗鉢類は加治木・始良系のものが見られる。また、白薩摩焼や壱野窯の土瓶などもあることから、当地点に公的施設が有ったことを示すものと考えられる。
- ・素焼きの瓦が多くあることから、当地点に公的施設が有ったことを示すものと考えられる。

#### まとめ

出水麓遺跡地頭館跡地点については、出水麓の成立期（17世紀初頭頃）から終盤（19世紀中期頃）に至るまで、継続的に政治的機能を持つ場所だったと考えられる。

## 2 御仮屋跡地点

### (1) 遺構

土坑（SK1）とP1については、埋土からの出土遺物により中世以降に形成されたものと考えられる。P2とP3については、土坑1に切られている事から、これより後世に形成されたものと考えられる。P4については、時期や性格等詳細は不明である。

### (2) 遺物

遺物については、近現代のものが多く表面採集された。このうち、19世紀の肥前産八角鉢と薩摩磁器染付皿については、宴席・接待用と考えられるもので、御仮屋という薩摩藩の公的施設としての機能を裏付けるものと考えられる。

#### まとめ

出水麓遺跡御仮屋跡地点について、遺物においては御仮屋の存在を示すものが見られたが、検出遺構及び残存している旧地層地点からは御仮屋の存在を示すに至らなかった。

(参考文献)

『出水麓遺跡』出水市教育委員会 1995.3

『出水麓遺跡(2)』出水市教育委員会 1998.3

『出水麓遺跡(御仮屋跡・旧税所邸)』出水市教育委員会 2010.3

『笹原遺跡(笹原茶屋跡：茶屋ノ元B遺跡)』出水市教育委員会 2006.3

『鹿兒島城二之丸跡(遺物編)』鹿兒島県教育委員会 1992.3

『薩摩川内市平佐焼窯跡群の考古学的研究』渡辺芳郎 鹿兒島大学法文学部人文学科異文化交流論研究室 2007

『出水郷土誌(上巻・下巻)』出水市 2004.9

『出水麓』伝統的建造物群保存対策調査報告書 出水市教育委員会 1989.3





出水麓 航空写真





地頭館跡地点 建物1（北から）

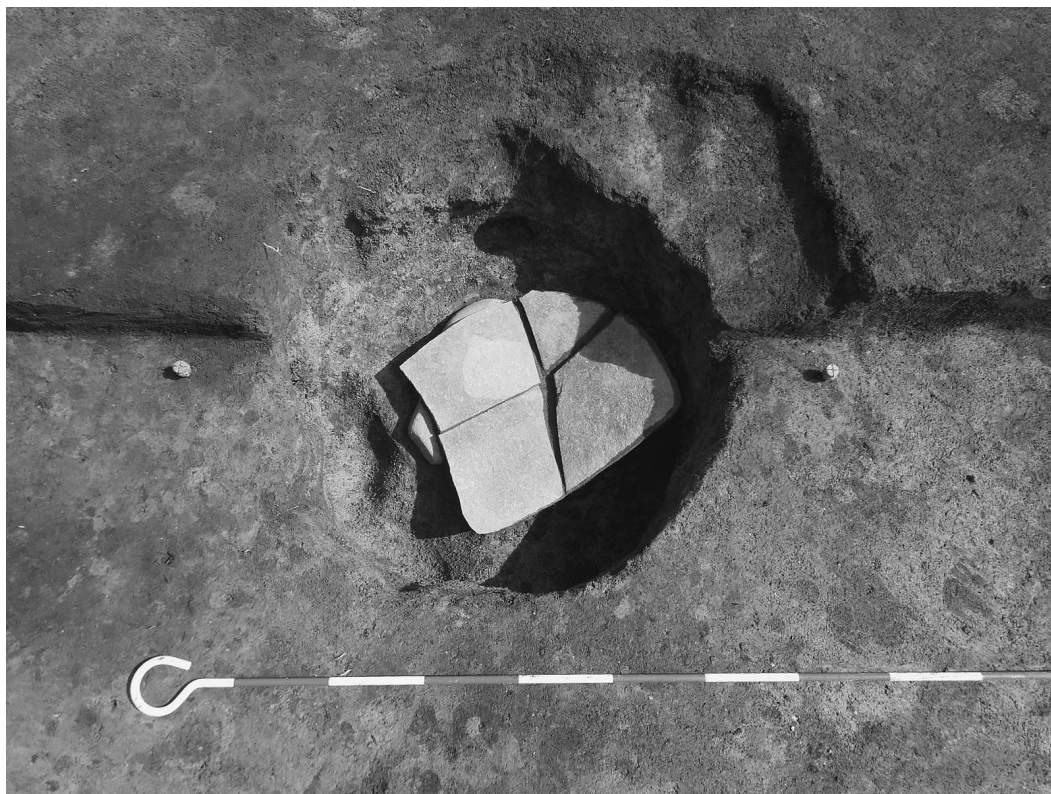


地頭館跡地点 溝状遺構完掘状況（西から）



地頭館跡地点 溝状遺構完掘状況（北から）





地頭館跡地点 SB1完掘状況



地頭館跡地点 D3区東壁土層断面



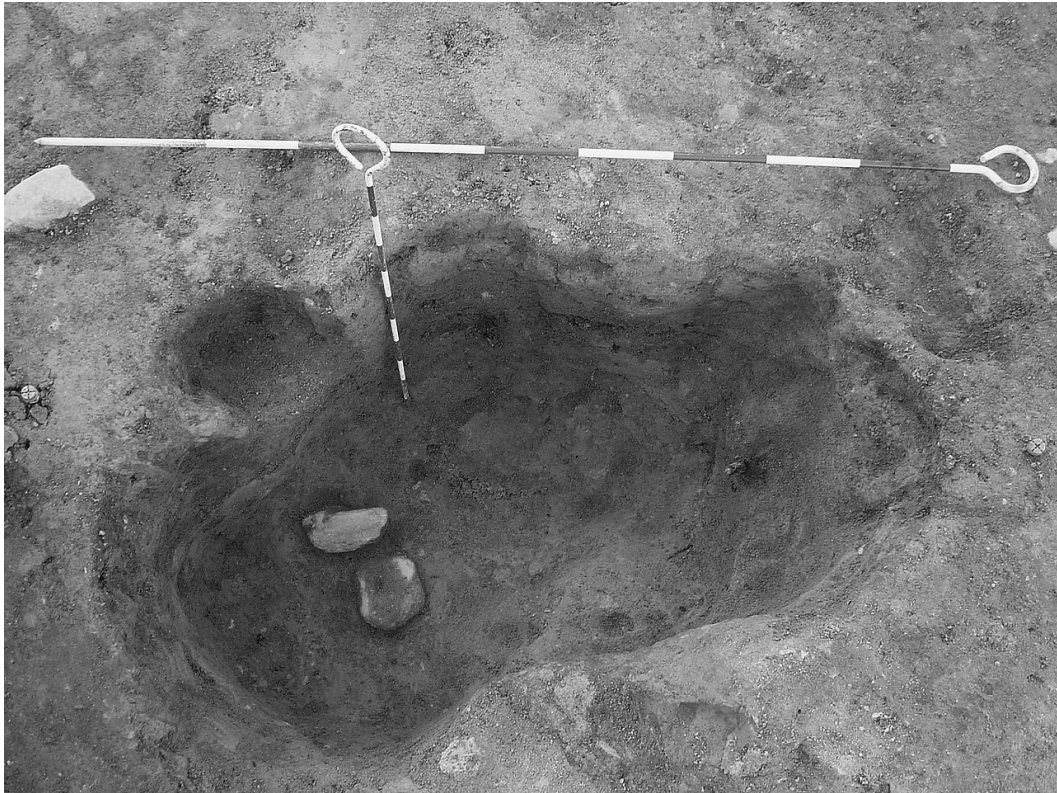


御仮屋地点 表土除去作業状況



御仮屋跡地点 旧地層残存部検出状況（北西から）

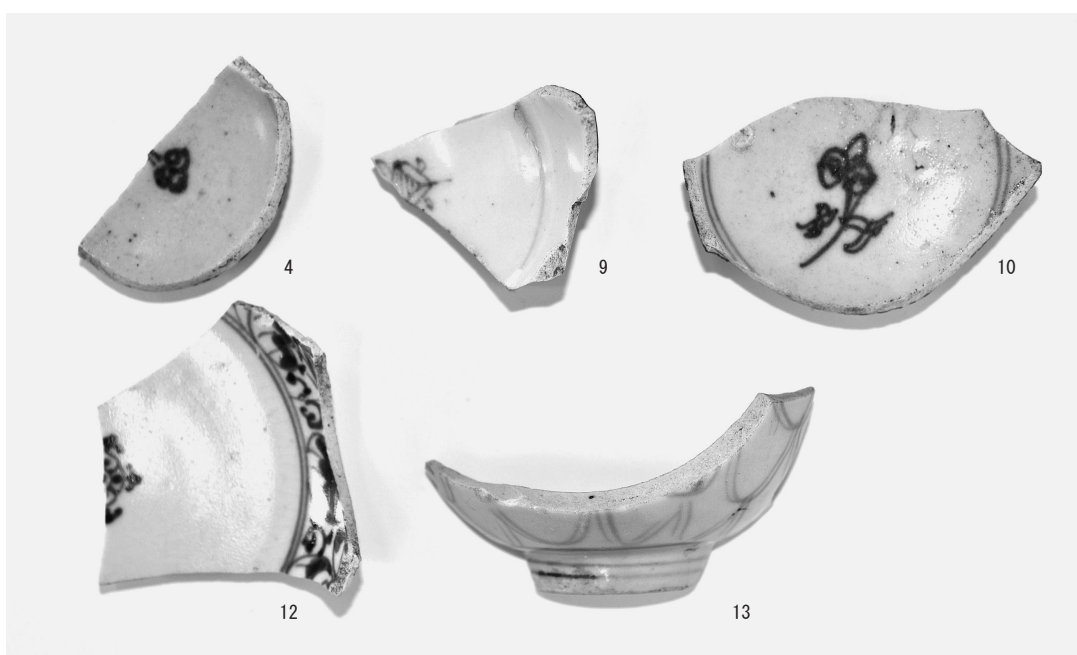
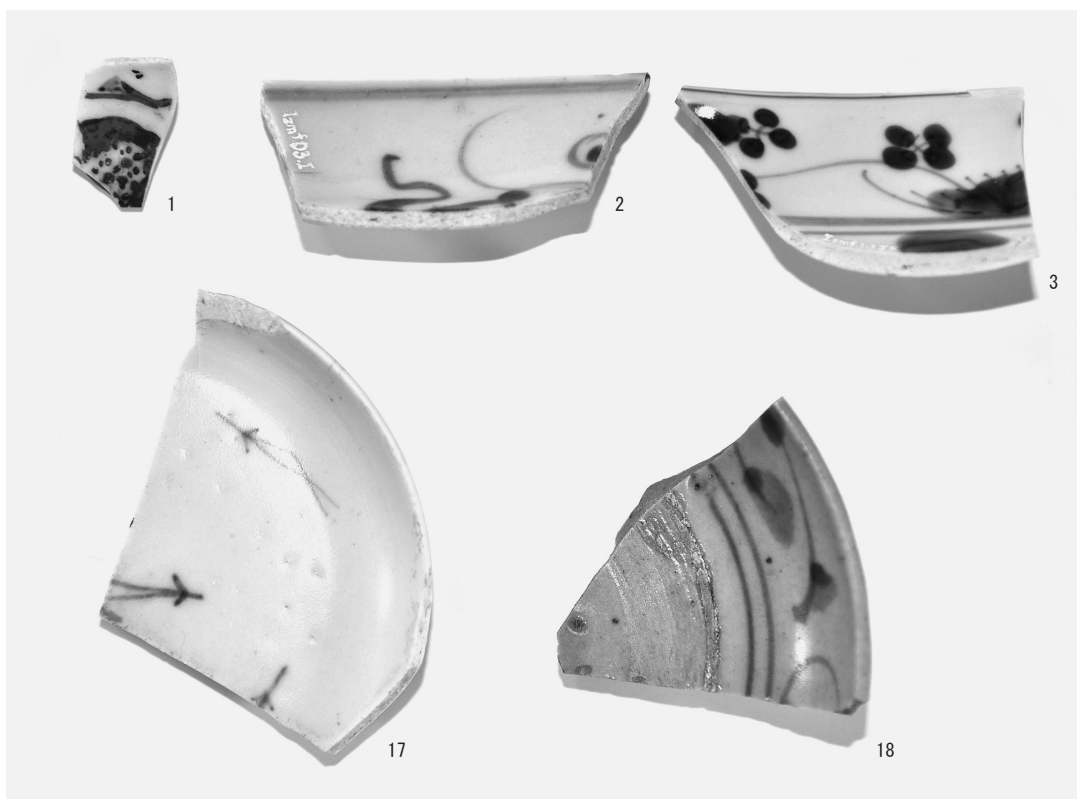
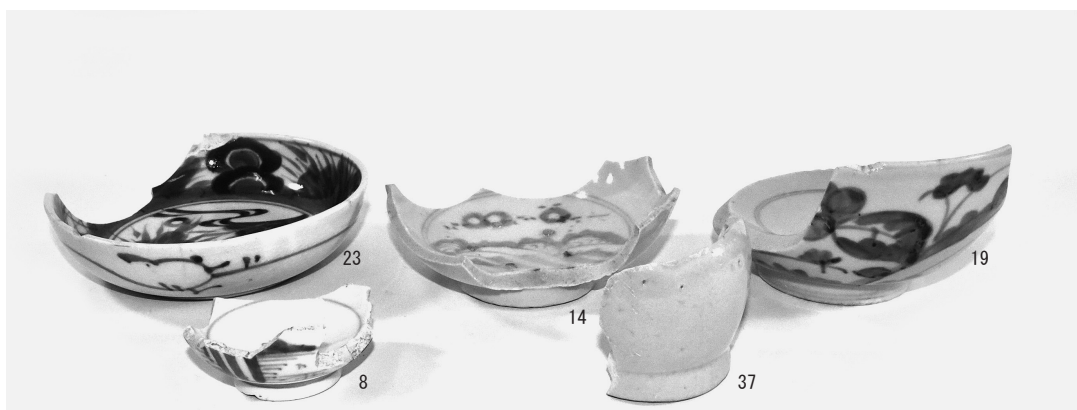




御飯屋地点 SK1、P2、P3完掘状況（東から）

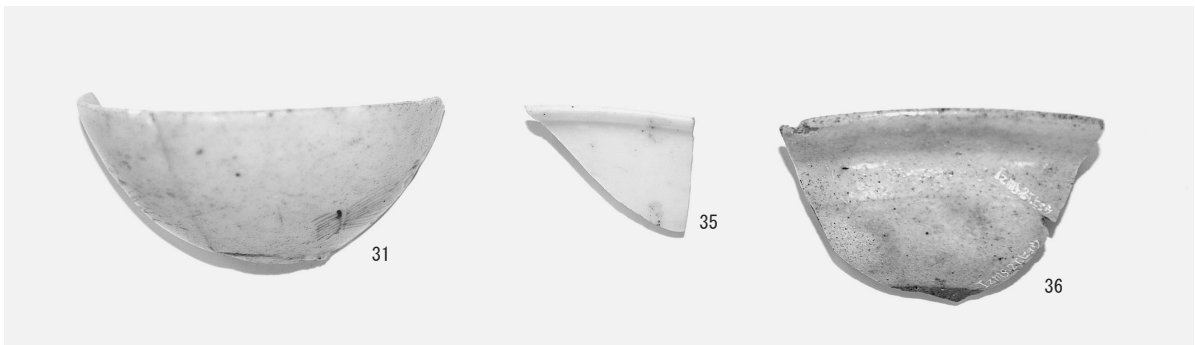
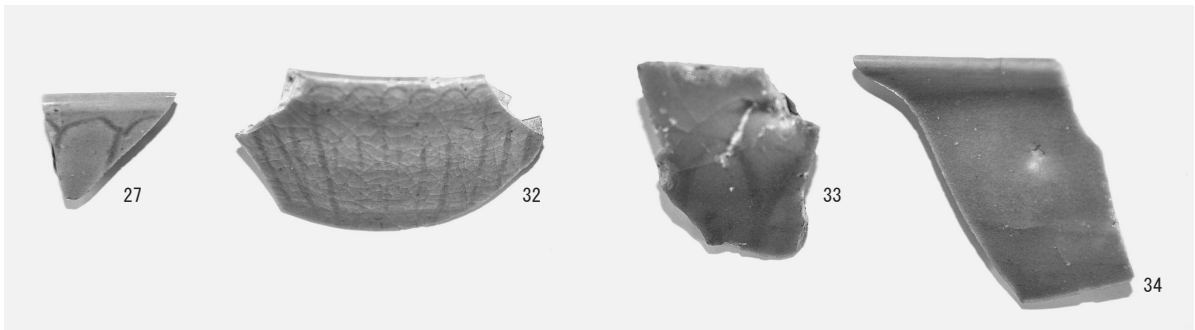
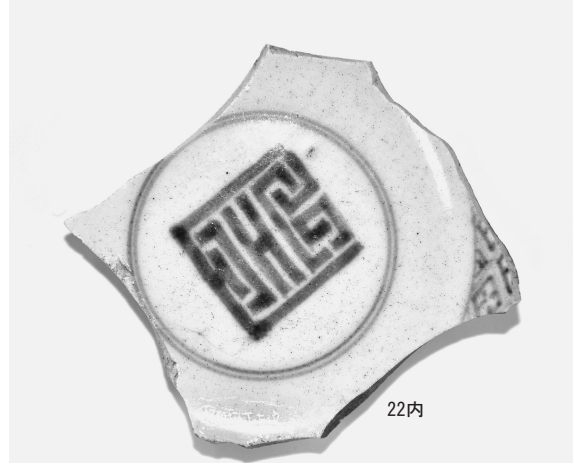
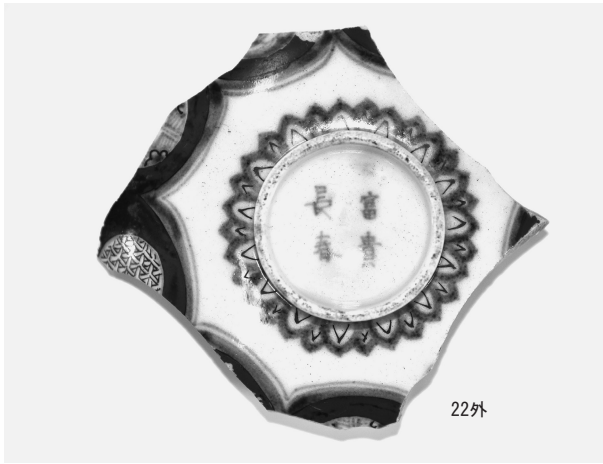
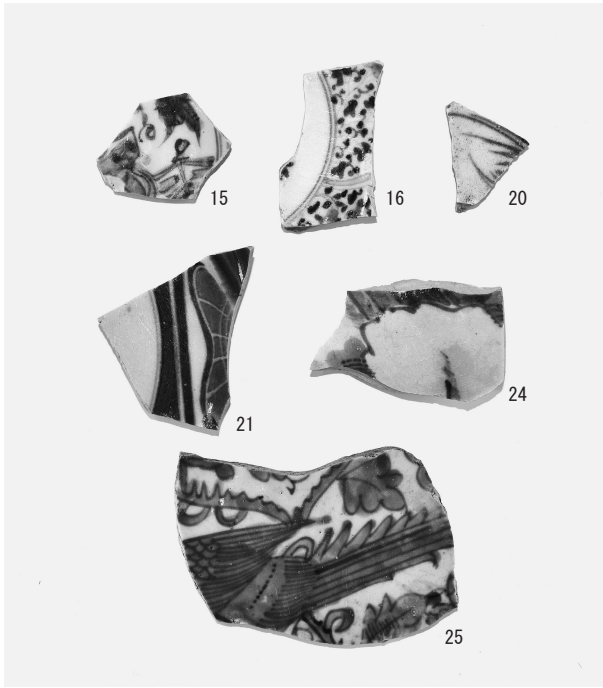


御飯屋跡地点 完掘状況（南東から）

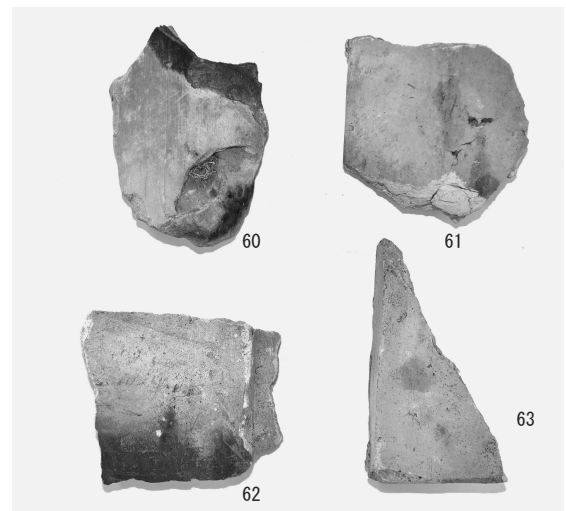
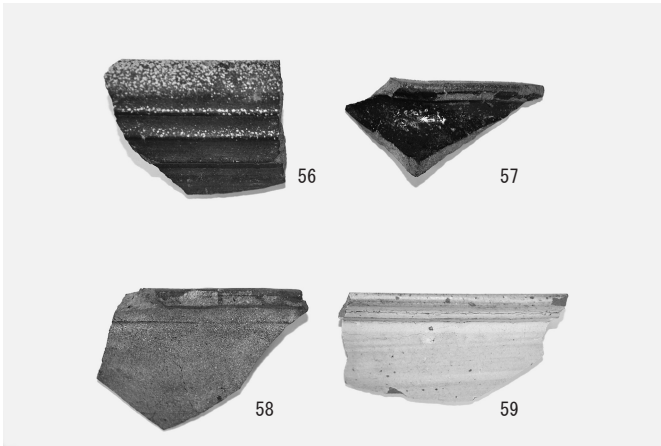
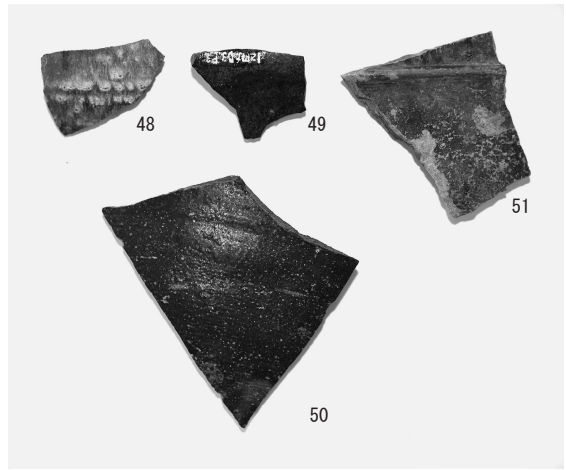
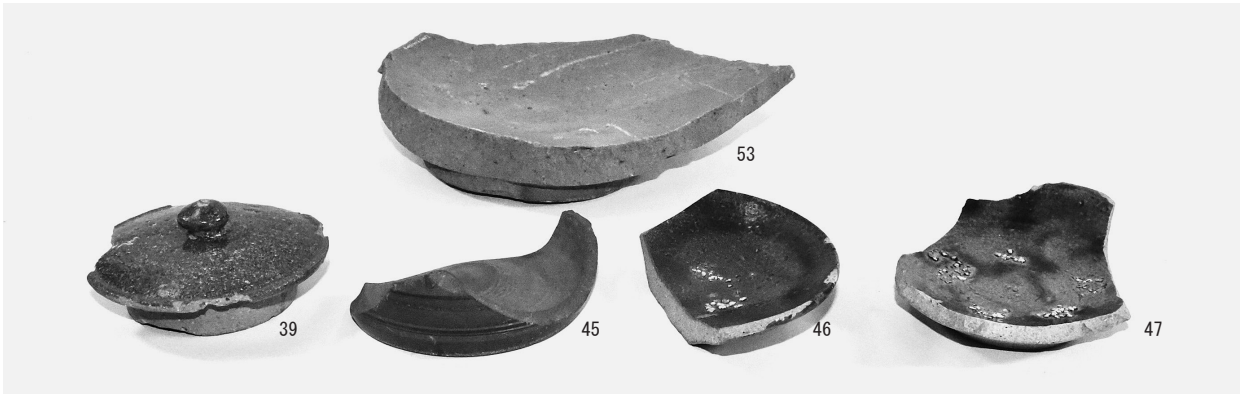


地頭館跡地点出土遺物 磁器類



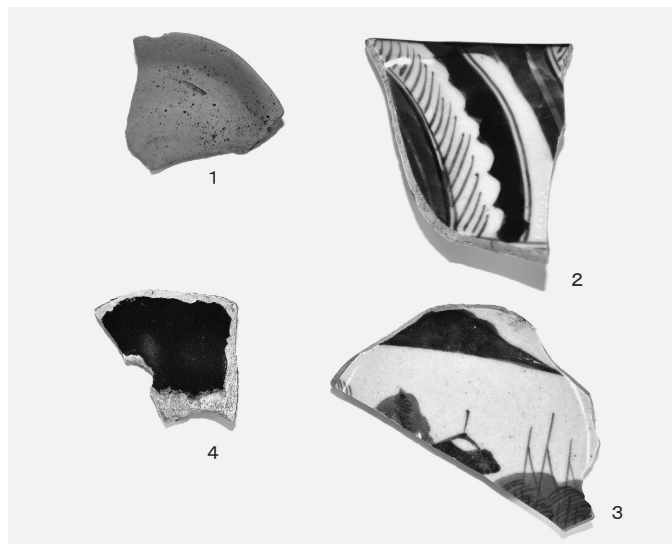
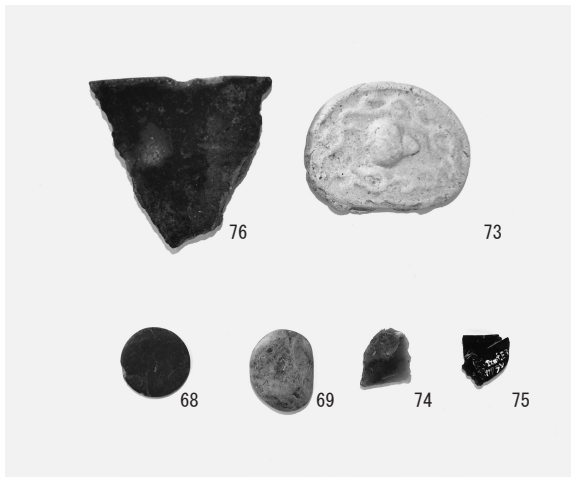
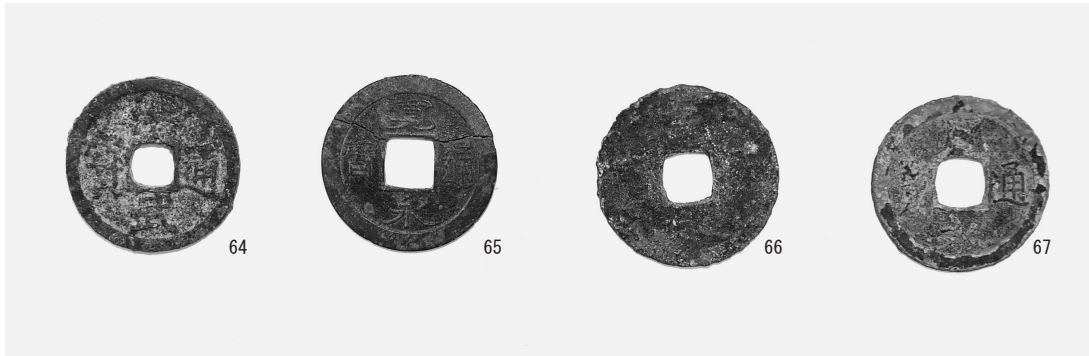


地頭跡地点出土遺物 磁器類



地頭館跡地点出土遺物 陶器類、瓦類





地頭跡地点出土遺物 その他の遺物、(最下段) 御仮屋跡地点出土遺物

出水市埋蔵文化財発掘調査報告書（26）

出水麓遺跡（3） 発掘調査報告書

2018年3月

発行 出水市教育委員会  
〒899-0292 鹿児島県出水市緑町1番3号  
TEL 0996-63-2111

印刷 株式会社あすなる印刷  
〒899-0216 鹿児島県出水市大野原町1982  
TEL 0996-62-2034